

岩手県文化財調査報告書第52集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

- III -

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本道路公団

東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— III —

序

地域開発に伴う交通網等の整備事業は、現代社会の進歩発展から生じる必然的な要請であり、県内においても、このような建設事業が、多く計画・実施されております。

しかしながら、これらと関連してくる埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で、營々と培い育て上げてきた貴重な文化遺産であり、その保存をはかり、活用を考え、新たな文化創造の糧としていくことも、現代に生きる私たちの責務であります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として各方面からの期待をになって、県内を南北に縦貫してつくられる大規模な建設工事であり、一関盛岡間がすでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。この建設工事の施行に關係した一関・西根インター間99遺跡について、日本道路公団仙台建設局からの委託をうけ、岩手県教育委員会が調査主体となって、昭和47年度から53年度までの7年間にわたって発掘調査を実施し、その整理作業と報告書の作成を昭和53年度から4カ年計画で現在実施しております。

本書は東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第3分冊目として、紫波町10遺跡について集録いたしております。これらは縄文・弥生・古代にかかる遺跡群で、同地区の歴史究明上、多くの貴重な成果を得ることができました。

この報告書が、記録保存の成果として社会教育や学術研究の場に役立つことを切望いたします。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新里 益

例 言

1. 本書は東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第Ⅲ分冊として、紫波地区（紫波郡紫波町所在〈柳田館・栗田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡を除く〉）の10遺跡について作成したもので、調査は昭和49年度から51年度に実施されたものであり、詳細は次ページの表の通りである。

2. 調査および整理にあたって、次の方々と機関のご教示を賜わった。（敬称略・順不同）
田中喜多美（県文化財審議員）

板橋 源（県文化財審議員・岩大名譽教授）

草間 優一（県文化財審議員・岩大教授）

司東 真雄（県文化財審議員）

岡田 康弘（文化庁）

樋口 清治（東京国立文化財研究所）

川崎 利夫（山形県文化課）

須藤 隆（東北大）

林 謙作（北海道大学）

福島県文化センター遺跡調査課

（財）岩手県埋蔵文化財センター

3. 資料の鑑定・分析については、次の方々と機関のご教示、ご協力を賜わった。（敬称略、順不同）

石材鑑定 佐藤 二郎（岩手県立杜陵高校）

樹種鑑定 吉田 栄一（岩大農学部林学科）

人骨鑑定 桂 秀策（岩手医大）

土器加熱実験 沢田 正昭（奈良国立文化財研究所）

墨鑑定 室谷 寛（工学博士）

鉄滓分析 岩手県工業試験場

カーボンディティング 日本アイソトープ協会

4. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図・20万分の1地勢図を使用したものである。

5. グリット配置図は、日本道路公団作成による「TOHOKU EXPRESSWAY PLAN」図を使用し、遺跡・遺構等の方向表示は同図の第10系座標の北方向である。

6. 遺跡における相層の色調観察は、小山・竹原編著「新版 標準土色帳」日本色研事業㈱を使用した。

7. 遺物・写真・実測図等の資料は岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。

8. 調査主体者 岩手県教育委員会

日本道路公団

9. 調査担当者 岩手県教育委員会事務局文化課

発掘調査 整理報告書作成担当者は下記の通りである。なお整理補助の臨時職員は巻末職員一覧にその氏名を記載した。

序文執筆 1 経過 吉田 努

2 調査の方法について 吉田 努

3 整理について 相原康二

紫波地区概観 三上 昭

収録遺跡整理執筆者および発掘調査者は次の表の通りである。

収録遺跡と整理執筆・発掘調査者一覧

遺跡名 (略号)	所在地	調査期間 自～至	測定面積 (㎡)(実測面積)	原点杭	整理、 執筆者	発掘調査者
宮手 (MT74-75-76)	紫波町 宮手字朴田21-4	昭和49年9月26日～9月30日 ・ 49年10月21日～11月27日 ・ 50年3月10日～3月31日 ・ 51年4月5日～6月24日	5,000 (4,410)	STA526	三上 昭	菊地郁雄 阿部省吾 高村嘉夫 三上 昭 高橋義介 中川重紀 千葉周秋 高橋信夫
上平沢新田 (KHS75)	紫波町 上平沢新田112地	昭和50年4月21日～10月18日 ・ 50年11月10日～11月29日	9,800 (9,800)	STA516	吉田 努 千葉周秋	菊地郁雄 吉田 努 千葉周秋 中村清也 高橋信夫
浦田B (UTB75)	紫波町土館字浦田28	昭和50年4月15日	3,500 (3,500)		三上 昭	三上 昭 島 隆
浦田A (UTA75)	紫波町 土館字浦田53/1	昭和50年4月17日	6,300 (4,500)		三上 昭	三上 昭 島 隆
埴池 (FD75-76)	紫波町大字片寄 字漆立第1地割他	昭和50年10月1日～12月23日 ・ 51年4月6日～10月2日	12,000 (10,400)	STA468	齊藤 淳	瀬川司男 齊藤 淳 本宮雄輔 大森松司 阿部省吾 鈴木明美 鈴木よね子 中川重紀 高橋義介 及川範人 佐藤とよ子 佐藤草夫
後在所A (GZA74)	紫波町 片寄字後在所1/30	昭和49年11月13日～11月16日	6,500 (6,500)		齊藤 淳	吉田 努 阿部省吾
後在所B (GZB76)	紫波町片寄字後在所	昭和51年5月10日～5月22日	2,840 (832)		齊藤 淳	瀬川司男
後在所C (GZC74)	紫波町片寄字後在所	昭和49年11月16日～11月21日	3,500 (2,500)		齊藤 淳	吉田 努 阿部省吾
後在所D (GZD75)	紫波町片寄字後在所	昭和50年10月6日～10月31日	3,000 (1,500)	STA467	齊藤 淳	瀬川司男 本宮雄輔 齊藤 淳 大森松司 中川重紀 高橋義介
太明神 (DMZ75)	紫波町 片寄字太明神43/1	昭和50年9月15日～12月22日	21,500 (10,000)	I区STA 471+40 II区STA 473	吉田 努 千葉周秋 佐藤和男 佐伯研二 中川重紀 高橋義介	菊地郁雄 吉田 努 千葉周秋 高橋信夫 中村清也 三上 昭 佐藤和男 佐伯研二 中川重紀 高橋義介

一 目 次

目 次

序 文

1. 経 過
2. 調査の方法について
3. 整理について

本 文

紫波地区概観

1. 地形概観..... 2
2. 周辺の遺跡..... 2

宮 手 遺 跡

- I 遺跡の位置と立地..... 7
- II 調査の経過..... 8
- III 発見された遺構..... 10
 - 1 住居跡..... 10
 - 2 焼土遺構..... 89
 - 3 溝状土壙..... 92
 - 4 土 壙..... 103
 - 5 方形周溝..... 107
 - 6 円形土壙..... 110
 - 7 溝..... 111
 - 8 表土等より出土した遺物..... 112
- IV まとめ..... 126

上平沢新田遺跡

- I 遺跡の位置と立地..... 129
- II 調査地の層序..... 129
- III 発見された遺構と遺物..... 133
 - 1 竪穴住居跡と竪穴..... 133

- (1) 竪穴住居跡..... 133
- (2) 竪穴..... 171
- 2 掘立柱建物跡..... 173
- 3 土 壙..... 176
 - (1) 溝状土壙..... 176
 - (2) 円形状の土壙 他..... 181
- 4 炉跡と円形竪穴..... 190
 - (1) 炉跡と周辺の小ビット..... 190
 - (2) 円形竪穴遺構..... 194
- 5 四丸方形周溝..... 194
- 6 溝、その他..... 195
- 7 表面採集等の遺物..... 198

IV 考察とまとめ..... 201

浦田 A・B 遺跡

- I 調査地の位置と立地..... 219
- II 調査の経過と結果..... 219

墳 館 遺 跡

- I 遺跡の位置と立地..... 221
- II 遺跡の基本層位..... 221
- III 検出された遺構と遺物..... 222
 - 1 墳 墓..... 222
 - 2 繩文時代の遺構と遺物..... 267
 - 3 弥生時代の遺構と遺物..... 296
 - 4 歴史時代の遺構と遺物..... 302
- 5 まとめ..... 318

後在所 A～D 遺跡

- I 遺跡の位置と立地..... 321
- II 遺跡の基本層位..... 321
- III 検出された遺構と遺物..... 321

第 1 号墓.....	322
第 2 号墓.....	324
第 3 号墓.....	324
副葬品.....	324
IV 考察とまとめ.....	328

大明神遺跡

I 遺跡の位置と立地.....	335
II 調査地の層序.....	335
III 発見された遺構と遺物.....	336
1 穴住居跡.....	336
2 炉跡.....	357
3 埋設土器.....	357
4 土壙.....	360
IV 遺物.....	378
1 土器.....	378
2 石器.....	411
V まとめ.....	433

写真図版

宮手遺跡.....	437
上平沢新田遺跡.....	469
墳館遺跡.....	501
後在所 D 遺跡.....	537
大明神遺跡.....	545

岩手県教育委員会事務局文化課職員

(埋蔵文化財関係) 一覧.....581

序文

1 経過

県内の東北縦貫自動車道建設は、昭和40年11月仙台・盛岡間の基本計画の決定に始まり、昭和43年4月の施行命令によって具体化される。

これによって破壊される埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本道路公団の覚書により、岩手県教育委員会がおこなうことになった。

まず、一関・盛岡間の路線予定地内の分布調査が、昭和42年及び43年に実施され、昭和45年2月19日水沢・花巻間40km、同年11月25日一関・胆沢間30km、46年2月10日石鳥谷・盛岡間29kmの路線発表がなされたことに伴ない、昭和47年8月～9月に、用地巾50mで現地確認調査、同年10月インターチェンジ及び付帯施設予定地内の現地確認調査等が順次実施され、一関・盛岡間の調査対象遺跡は当初82ヶ所確認された。

これらの破壊される遺跡について、できるだけくわしく調査記録し、遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的とし、昭和47年度に北上市・花巻市・金ヶ崎町所在の遺跡から調査が開始され、用地買収、着工順位に従って順次すすめられた。

この間、調査除外としたもの4ヶ所がある。一関市刈又遺跡は過去の開田による破壊の程度が大きく煙滅、一関市松の木遺跡は宅地化による破壊、衣川村糸形陣場跡は所在位置が路線からはずれる。衣川村二枚貝化石層は遺跡としての調査対象としないなどの理由による。

また、路線変更によって保存されたのが、平泉町伝護摩堂跡である。この遺跡は奥州平泉文化との関連が考えられ、路線発表後に路線内に所在することが確認され、急遽日本道路公団と協議し、路線を西側に変更した。一方、工事直前もしくは工事中に新しく確認追加されたものに、土取場の和賀町梅ノ木Ⅰ～Ⅲ遺跡、路線内では江釣子村下谷地B遺跡・紫波町墳館遺跡および柳田館遺跡がある。

昭和49年6月20日、盛岡・安代間53kmの路線発表があり、この区間のうち、盛岡・西根（松川まで）間が調査対象の日程にくりこまれ、当初、8遺跡が確認されたが、工事中に滝沢村卯遠坂遺跡が発見追加され、更に紫波インターチェンジの誘致新設に関連し、栗田Ⅰ～Ⅲ遺跡が調査対象となる。

以上のように、一関・西根（松川まで）区間の調査対象遺跡数は、除外、新規発見などによる変動を見てきた。このことは、埋蔵文化財保護の基本の一つとして、分布調査の重要性が改

めて問われる一面でもある。結局、調査遺跡数は、99遺跡、18市町村におよぶものとなった。

調査をすすめる一方、文化庁、日本道路公団との協議によって、前述の伝護摩堂跡を完全保存したのをはじめ、江釣子村鳩岡崎遺跡の縄文中期の大竪穴住居跡の一部分、水沢市石田遺跡では、奈良時代末から平安時代初期に相当する焼失家屋1棟、紫波町上平沢新田遺跡では、平安時代相当の焼失家屋1棟の路線境検出遺構を一部精査の上、それぞれ埋めもどし現地保存をした。

また、江釣子村瑞谷地遺跡の古墳1基、紫波町墳館遺跡の墳墓1基、柳田館遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡の一部は、施工方法や設計変更等によって可能な限りの保存策をとった。

しかし、これらの保存遺構や遺跡の管理、活用は今後十分に留意しなければならないものであり、それがなされなければ完全な保存策であったとは言い得ない。

昭和47年度に始まった調査は、昭和53年度の紫波町栗田田遺跡を最後に終り、現在、整理作業をすすめているが、東北縦貫自動車道建設の具体化以来、事業をすすめるに当って、終始指導と助言をくださった県内外の協力者、および献身的な協力を得た関係市町村教育委員会、学校、関係諸機関、地元作業員の方々をはじめ各位に改めて敬意を表したい。

なお、西根町以北の東北縦貫自動車道関連遺跡は、(財)岩手県埋蔵文化財センターによって調査されることになり、昭和53年度から実施されている。

2. 調査の方法について

(1) 調査対象範囲の選定は、遺跡の中で用地内および付帯施設を含む関連部分は、すべて調査対象とした。更に、当該遺跡周辺の分布調査を可能な限り実施することにつとめ、調査地とそれをとりまく遺跡群との関連解釈の一助に資することとした。

(2) 調査対象全域に次のような地区を設定した。

- ①地区設定のための原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭の任意のものに定め、それと他の中心杭の2点間を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。
- ②南北の基準線をもとに、30mを1ブロックとし、北から順にA・B……の記号を付し、これを東西、南北に10等分し3m×3mのグリッドを設定、グリッド名は北から順にa-j、南北基準線から東方へ50・53・56……、西方へ03・06・09……の記号を付し、これとブロック記号の組合せで表わした。例えば、Aa03・Aa50のようになる。

(3) 発掘および記録について、発掘調査は絶対にくりかえしの出来ない作業である。特に、緊急調査と言う性格と記録保存を考えるとき、調査の過程で観察された事項は可能な限り詳細

一 序 文

に、しかもすべて客観的データーとして記録されねばならないし、記録者の解釈と観察された事実とが混同されぬよう留意しながら①遺構群をひとつのまとまりとして把握すること、文化層が重なっている場合、層序とともにそれぞれの文化層のひろがりを確実に把握すること、更に緊急調査の場合、事後の保存が困難である以上、トレンチによる部分発掘は回避すべきであることからグリット設定にもとづく平面発掘につとめた。

②原則として3m×3mのグリットで、調査地における遺物・遺構の分布状況を把握するため、「ちどり」状に入力による粗据をすることにしたが、結果的に機械力の導入も多かった。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的な内容を究明するため必要範囲の全面発掘を実施した。

③遺構が検出された場合、該当グリット名を付した。その場合もっとも北西に位置するグリット名で呼称することを原則とした。精査に当っては、2分法・4分法による平面発掘に留意し、遺構の性格と内部堆積状況・構造・重複等を把握しながら完掘することとした。

④遺物は、原則としてグリットごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録し、遺構に直接関係するものや、年代決定の資料となり得るものについては出土レベル・位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

⑤遺物の出土状況・層位・遺構に関する所見等の記録は、実測図・遺構カード・フィールドノートを用い、全体の問題点、進行は調査日誌に記録した。

⑥写真記録は、35mm版モノクロ、カラー・6×7cm版モノクロを主として用いた。

(4) 実測方法 ①発掘された遺構の実測は、原則として造り方実則を用い、平板実測は補助にとどめた。②原図の縮尺は $1/50$ に統一したが、遺構・遺物の細部については、必要に応じて $1/50$ 縮尺を採用した。

(5) 関連科学との連けいについて、総合的な見地からの記録作業という意味で、考古学のみならず関連科学の研究者、とくに自然科学系統の分野との連けいに留意し、調査現場の実見と見解を求めるこことつとめた。

3. 整理について

整理にあたっては調査の性格(「緊急調査」と「記録保存」)を十分に考慮した。したがって可能な限り詳細な記録を作成することと、その公開を主目的とした。なおいわゆる「行政調査(とくに緊急調査)」と「学術調査」の異同を、その「現場」に投入された技術、方法の次元に還元して論ずるのは妥当ではない。「緊急調査」の「現場・調査」の位置づけについては、本課にも若干の反省点がある。

(1) いわゆる「珍品主義」・「一番主義」を排し、得た資料のすべてを観察し、それぞれに応じた記録を作成することを目指した。各調査地(「遺跡」)・調査資料の正当な評価の資料を提示するためであるし、それが「記録保存」の趣旨にも連なるからである。その結果として記述が若干繁雑になった。ただし実際には、調査担当者の設定仮説が整理担当者に十分に伝わっていないなどのことも目立ち、満足のいく整理を必ずしもなしえなかった調査地もまた多い。遺憾である。また本書に提示した諸仮説、見解は本課の統一見解ではなく、整理担当者のそれである。具体的には、①観察事項の正確な伝達 ②仮説の提示とその展開、吟味 ③新規の仮説、問題点の提起 ④新しい資料操作法の提示、などを目ざしたが、前述のように必ずしも十分には実施できなかった。

(2) 調査地はそれのみ単独での評価は避け、一定の地域内とりわけ他の「遺跡」との関係を重視して解釈・評価するように努めた。「周辺の遺跡」の項がや・繁雑にわたっているのはその為である。これは(1)の実践をめざすのみならず、遺構存在を遺跡成立の絶対条件視する見解への反論のためにも必要であり、とりわけ埋蔵文化財保護にはきわめて重要な観点である。

(3) 調査時と同様に「関連諸科学・諸技術との連携」に留意した。(1)で述べた目的を満足させる為に必要不可欠であり、さらにはその保存処理・各種データの蓄積・その公開も本課に課せられた責務だからである。今後の継続実施を考慮し、可能なものは努めて本県内の機関・公所・その他に連携ないし委託先を求めた。具体的実施例は、年代測定(カーボンディティング・熱ルミネッセンス法他)・材質鑑定(石材他)・樹種鑑定(木器・木材・柱脚他)・種子鑑定(炭化米・雑穀類・雑草類他)・花粉分析・人骨(歯)鑑定・獸骨(家畜を含む)鑑定・組成分析(釉薬・土器胎土・火山灰他)・鱗分析・地質学的諸分析等にわたるが、今後も新分野を加える必要がある。保存処理は、木器・木材・柱脚類、鉄器類を中心に実施しているが、これも今後さらに新分野のものについて実施する必要がある。地質学的知見・教示は(2)などとの関連で、調査地および周辺の「遺跡」の立地・占地に関して、また遺物と出土層(とくに火山灰層)との関連に留意して援用した。大規模調査地については航空写真・ステレオカメラにもとづく作図を採用した。

(4) すべての対象(遺構・遺物・「遺跡」)について、技法的分析に加え組みあわせ重視の観点をも加えてある。

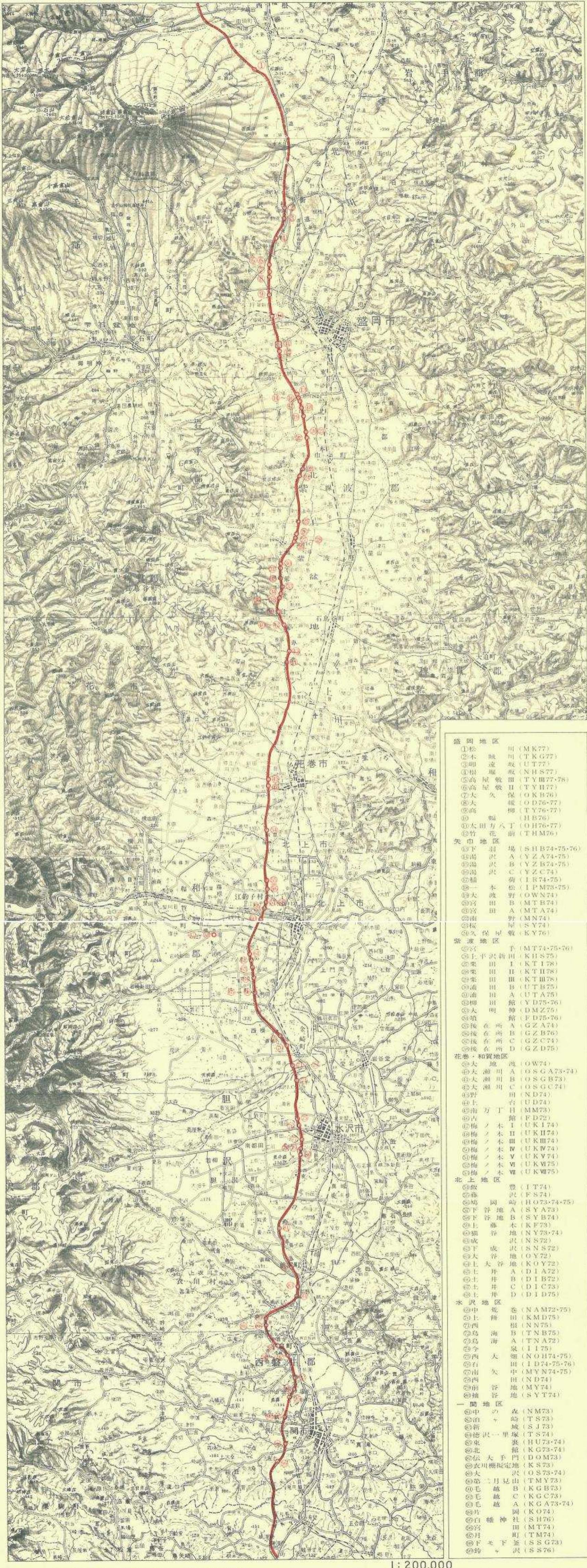
(5) 以上の技術的基準・指標として『出土遺物の整理について』(昭和47年作成のち一部修正)を作成し大略それに準拠した整理を実施した。細部は省略するが、大枠は①観察事項を正確に伝えるための作図法他の技術的部門、②文章表現上の留意点とからなる。後者については観察事項と解釈の唆別・不明事項の不明の理由明示などがとくに求められている。

(6) 得た厖大な資料の公開は、別途計画のもとに実施されるであろう。

第1表

東北自動車道関係調査遺跡一覧

地名	遺跡名	No	地名	調査年度	調査区域	市町村名	%	道路名	調査年度	調査区域	市町村名	%	道路名	調査年度	調査区域	市町村名	%	道路名	調査年度
岩手	西相馬	1	松川	52		26 上平沼新田	50		49		51 横ノ木V	49		76 石田	49-50-51				
	荒沢村	2	木賊川	52		27 要田 I	53		50		52 梅ノ木M	50		77 南矢中	49-50				
	3 那遠坂	52		28 栗田 II	53		53		50		53 梅ノ木M	50		78 西田	49				
	4 根掘坂	52		29 葉田 III	53		54		49		54 飯豊	49		79 前谷地	49				
	5 高尾敷	52-53		30 沖田 B	50		55 横		49		55 横	49		80 補谷地	49				
	6 高屋敷且	52		31 沖田 A	50		56 橋		49-50		56 橋	48-49-50		81 中森	48				
	7 大久保	51		32 鶴田	50-51		57 下谷地 A		48		57 下谷地 A	48		82 白崎	48				
	8 大綱	51		33 大明神	50		58 下谷地 B		49		58 下谷地 B	49		83 新城	48				
	9 高輪	51		34 塙	50-51		59 上野本		48		59 上野本	48		84 鮎沢一里塚	49				
	10 鎧岡市	51		35 御在所 A	49		60 燕谷地		49		60 燕谷地	48-49		85 東裏	48-49				
	11 大田方八丁	51-52		36 御在所 B	51		61 成沢		47		61 成沢	47		86 北館	48-49				
	12 宮花輪	51		37 御在所 C	49		62 下谷地		47		62 下谷地	47		87 伝大手門跡	48				
	13 下羽鳥	49-50-51		38 御在所 D	50		63 大谷地		47		63 大谷地	47		88 衣川櫻定跡	48				
	14 福沢 A	49-50		39 大鹿渡	49		64 上大谷地		47		64 上大谷地	47		89 大沢	48-49				
	15 福沢 B	49-50		40 大瀬川 A	48-49		65 土井 A		47		65 土井 A	47		90 第二月見山	48				
	16 福沢 C	49		41 大瀬川 B	48		66 土井 B		47		66 土井 B	47		91 毛越 B	48				
	17 福荷	49-50		42 大瀬川 C	49		67 土井 C		48		67 土井 C	48		92 毛越 C	48				
	矢内野	18 一本松	48-50	43 野田	48		68 土井 D		50		68 土井 D	50		93 毛越 A	48-49				
	19 大宮野	49		44 上台	49		69 中荒參		50		69 中荒參	47-50		94 片堀	49				
	20 宮田 A	49		45 南原丁目	48		70 上根田		50		70 上根田	50		95 白幡神社	51				
	21 宮田 B	49		46 古	47		71 西根		50		71 西根	50		96 宮田	49				
	22 南野	49		47 梅ノ木 I	49		72 烏海		50		72 乌海	50		97 日町	49				
	23 桜屋	49		48 梅ノ木 II	49		73 乌海 A		47		73 乌海 A	47		98 下玉下条	48				
	24 久保屋敷	51		49 梅ノ木 III	49		74 今泉		50		74 今泉	50		99 鈴ヶ沢	51				
	紫波町	25 宮手	49-51	50 梅ノ木 IV	49		75 西大畠		50		75 西大畠	49-50							



本文



紫波地区概観

1. 地形概観

本調査地区は、紫波郡紫波町の北上川西部地区にある。従ってこの地区のみを対象とした。地区概観については、「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 一〇一」の地区概観に、関連する地区として概に紫波町の地区概観も記載されている。

紫波町西部地区の地形は、西から山地、丘陵地、段丘群、河岸低地、等からなる。

山地は、第三系より成る東根山(928m)、黒森山(647.1m)、諸倉山(713m)等の諸山があり、中央部に滝名川上流の山王海ダムがある。その東縁は断層崖と見られている。この山地東縁の外方に第三系に属す安山岩の露出として、北谷地山、城山がある。

丘陵地は、川崎山、松葉山等の山地東麓、土館・片寄地区の西側に見られるようである。

段丘群は、北上川西部地区の大部分を占め、調査地区もすべてこの上に立地する。現在までの研究成果によれば、古い順に、1.石鳥谷段丘(高位、西根段丘相当)、2.二枚橋段丘(中位、村崎野段丘相当)、3.花巻段丘(低位、金ヶ崎段丘相当)、4.都南段丘(低位、金ヶ崎段丘相当)である。1は、土館・片寄地区の西部山地東縁の山麓部。陣ヶ岡付近。京田・蔭沼付近。片寄南部。等にみられる。2は、1にともなって分布し、陣ヶ岡周辺。作岡・油田・檜付近。稻藤・京田付近。土館・片寄の北東側等にみられる。3は、西部山地東麓から東方へ広範囲にみられ、南伝法寺から水分周辺。土館・片寄の大部分。等を占めている。4は、3の外方や、これを刻む河谷に沿って分布する。

河岸低地は、北上川流域。滝名川流域。五内川流域等にみられる。この地区的河川は、みな北上川支流の小河川で、他には下松本・陣ヶ岡を東流し、五内川と合流する宮手川。東根山の南山麓を東流し、竹原地区で滝名川と合流する沢内川。竹原・宮手地区を東流し、本町川原で北上川に合流する大坪川。上平沢・平沢地区を東流し、甘木地区で北上川に合流する平沢川。滝名川の分流で、土館・片寄地区の西側を南流する山王海幹線水路等がある。

今回記載される遺跡中、浦田B・浦田A・柳田館・大明神・墳館・御在所D・御在所A・御在所B・御在所Cの各遺跡は、石鳥谷段丘上の頂部平坦地や緩斜面に。上平沢新田遺跡は、二枚橋段丘上の西南縁部に。宮手遺跡は、花巻段丘面に。それぞれ立地する。尚昭和56年度報告予定の栗田I・II・IIIの各遺跡は、花巻段丘面に立地する。

2. 周辺の遺跡

紫波地区的遺跡については、大部分が位置、範囲、時代等の調査が充分でないため、各関係

資料の修正・増補が必要と思われる。特に未確認の遺跡がかなりあると思われ、例えば、本調査地区では、栗田Ⅰ・Ⅱ及びⅢ遺跡は、紫波インター・エンジン部調査（昭和53年）の際に本線内にも遺跡の範囲が広がっている事が確認されたが、本線分の調査期間中（昭和50年前後）には、遺跡の存在が確認出来ず、未調査のままになった。浦田遺跡（周辺の遺跡地名表No.15）も、範囲確認が充分でなかったために、遺跡の一部が本線内に広がっていたが、未調査のままになってしまった。等の事例がある。

遺跡の分布状態は、縄文時代の遺跡が、西部山地東麓。段丘群上にかなり集中し、竹原・升沢地区（花巻段丘）。土館・片寄地区（石鳥谷段丘・花巻段丘）。城山周辺（石鳥谷段丘）。下越田地区（石鳥谷段丘）。に多くみられ、しかも古代・中近世の遺跡と重複しているものもかなりあり、下層の縄文期の遺構・遺物は、大部破壊されている現状のようである。大部分の遺跡は、中期・後期と登録されており、次いで晩期が若干みられ、早期・時期は、ほとんど確認されていない。東北新幹線関連の遺跡が紫波地区に10ヶ所あり、早期末～前期初頭の遺物が出土した杉ノ上Ⅲ遺跡。前期初頭の遺物が出土した杉ノ上Ⅰ遺跡。中期を中心とした、環状に並ぶ約150基の舟底形土壙群と、環状に回る約1,000基の柱穴状円形土壙群、及び住居跡を伴う集落を形成する西田遺跡。中期の遺物を出土した野上遺跡。後期の遺物を出土した大日堂遺跡と田頭遺跡。時期は不明であるが、溝状土壙を検出した古館駅前遺跡と古館橋遺跡が報告されている。西田遺跡以外は、遺構・遺物が少なく、遺跡の中心地点から外れていたようである。弥生時代の遺跡は、墳館遺跡以外は明確でないが、高水寺字田中（古館農協西側水田）。下松本字元地（古屋敷北側水田）。片寄字大明神。等が登録されている。奈良時代の遺跡としては、末期のものとして、岩手県埋蔵文化財センターが、国道4号線矢巾拡幅工事に伴う緊急事前調査として実施した稻村遺跡がある。その他には未だ確認されていない。平安時代の遺跡はかなり多く、古館・二日町・城山・陣ヶ岡、下松本・南伝法寺・作岡・五郎沼等の各地区に多くみられる。初期のものは、岩手県埋蔵文化財センターの実施した中田・古屋遺跡。東北新幹線関連の杉ノ上Ⅱ遺跡が報告されている。中後期として、東北新幹線関連の古館橋・古館駅前・杉ノ上Ⅰ・杉ノ上Ⅲ・田頭・大日堂・大銀・野上の各遺跡が報告されている。これらは石鳥谷・二枚橋・花巻の各段丘縁部付近に立地するのが大部分である。中近世の遺跡は、館跡や城砦が西部山地東麓や、陣ヶ岡、城山付近の石鳥谷段丘縁部に多くみられ、旧街道・一里塚・寺院跡・屋敷跡・経塚跡・水上交通跡等がみられる。

注1. 中川久夫ほか「北上川中流域沿岸の第四系および地形」地学雑誌第69卷第812号（1963）

注2. 「埋蔵文化財地図」岩手県教育委員会（1974）「紫波町史第1巻」紫波町（1972）

注3. 「栗田Ⅰ・Ⅱ遺跡—現地説明会資料」、「栗田Ⅲ遺跡—現地説明会資料」岩手県教育委員会（1978）

注4. 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局（1979）

注5. 「埋蔵文化財発掘調査略報—西田遺跡—（第3次調査）」岩手県教育委員会（1978.3）

注6. 「紫波町史第1巻」紫波町（1972）

注7. 「岩手県文化財発掘調査略報（昭和53年分）」岩手県埋蔵文化財センター（1979）

—紫波地区概観道路—



第2図 周辺の遺跡位置図

日 話 花 卷

周辺の遺跡地名表

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
1	上 山 新 田	縄文(後・晩期)	59	四 ツ 尾 一 代	平安
2	岩 清 水 館	中・近世	60	片 寄 上 久 保	平安
3	南 伝 法 寺 - 道 口	縄文(後期)	61	片 寄 + 能	安
4	平 田	平安	62	中 岛 鮎	安
5	和 田 橋	縄文	63	中 岛 鮎	安
6	小 茂 I - 霊 宝	縄文	64	古 館 藩	安
7	升 清 - 霊 宝	縄文	65	念 田 仁	安
8	升 清 - 小 森	縄文	66	中 田 仁	安
9	升 清 - 田 保	縄文	67	中 田 仁	安
10	升 清 - 田 保	縄文	68	中 田 仁	安
11	傍 勒 地	中・近世	69	稻 古 屋	安
12	傍 勒 地	縄文・中世	70	移 上 仁 村	安
13	寺 ん 二 塚	中・近世	71	移 上 仁 村	安
14	浦 田 館(新山神社)	縄文・中近世	72	移 上 仁 村	安
15	浦 田 古 墓	○	73	新 田 田 田	安
16	新 田 古 墓	○	74	移 上 田 田	安
17	愛 古 山	中・近世	75	蓮 堂 久 保 一 里	安
18	金 田 館	縄文・中近世	76	御 清 念 寺	安
19	浦 田 (A)	○	77	北 七 久 保 一 里	安
20	浦 田 (B)	○	78	善 念 寺	安
21	御 田 姉	中・近世	79	善 念 寺	安
22	片 寄 謙 立	縄文	80	善 念 寺	安
23	大 明 桂	縄文(中・後期)	81	北 七 久 保 一 里	安
24	墳 墓	○	82	高 水 保 館	安
25	十二 棚 古 墓	○	83	河 早 保 館	安
26	御 在 所 A - C	○	84	日 月 田 保 館	安
27	御 在 所 D	近 横	85	吉 兵 衛 部	安
28	内 光 寺	平 安	86	山 保 館	安
29	内 清 仁 田	縄文・平 安	87	日 月 有 田	安
30	南 伝 法 寺 - 中 屋 敦	平 安	88	七 久 保 館	安
31	筑 森 館	中・近世	89	日 月 仁 丹 野	安
32	久 々 館	中・近世	90	田 日 月 保 館	安
33	陣 ケ 国(月の輪形)	縄文・平 安・中 晩	91	大 日 月 保 館	安
34	手 棚 木 上 (A) - 棚 木 館	平 安・中・近世	92	小 路 仁 北 条 館	安
35	宮 手	縄文・平 安	93	比 重 館(志和城擬定地)	安
36	下 二 合	平 安	94	大 郎 銀 館	安
37	宮 手 - 朴 田 館	近 横	95	五 郎 銀 館	安
38	泉 地	中・近世	96	箱 清 承 一 塚	安
39	柳 田	平 安	97	謹 召 一 塚	安
40	上 平 沢 新 田	縄文・平 安	98	善 知 鳥 館	安
41	南 男 場 宮 通 II	近 横	99	西 田 西 田 館	安
42	南 男 場 宮 通 II	○	100	片 寄 下 川 館	安
43	栗 田 I - II	○	101	日 本 森 館	安
44	栗 田 III	○	102	犬 吹 森 館	安
45	福 修 館	中・近世	103	間 本 森 館	安
46	平 古 墓	中・近世	104	犬 吹 森 館	安
47	平 古 墓	平 安	105	星 山 森 館	安
48	平 館 - 中 島	縄文・平 安	106	花 卷 森 館	安
49	沖 田 I	平 安	107	大 卷 卷 森 館	安
50	新 田 黒 垂	縄文	108	大 卷 長 森 館	安
51	新 田 黒 垂	○	109	大 卷 長 森 館	安
52	尾 排 I - 賀	縄文	110	彦 部 小 久 保 館	安
53	尾 排 カ ラ ハ 以	○	111	彦 部 小 久 保 館	安
54	片 寄 中 島	縄文・平 安	112	元 上 保 館	安
55	片 寄 I - 田	縄文・平 安	113	野 部 部 外 館	安
56	上 手 田	縄文・平 安	114	日 部 部 外 館	安
57	上 久 保 館	中・近世	115	日 部 部 外 館	安
58	片 寄 野 堀	○			

・ 東北縱貫自動車道関連

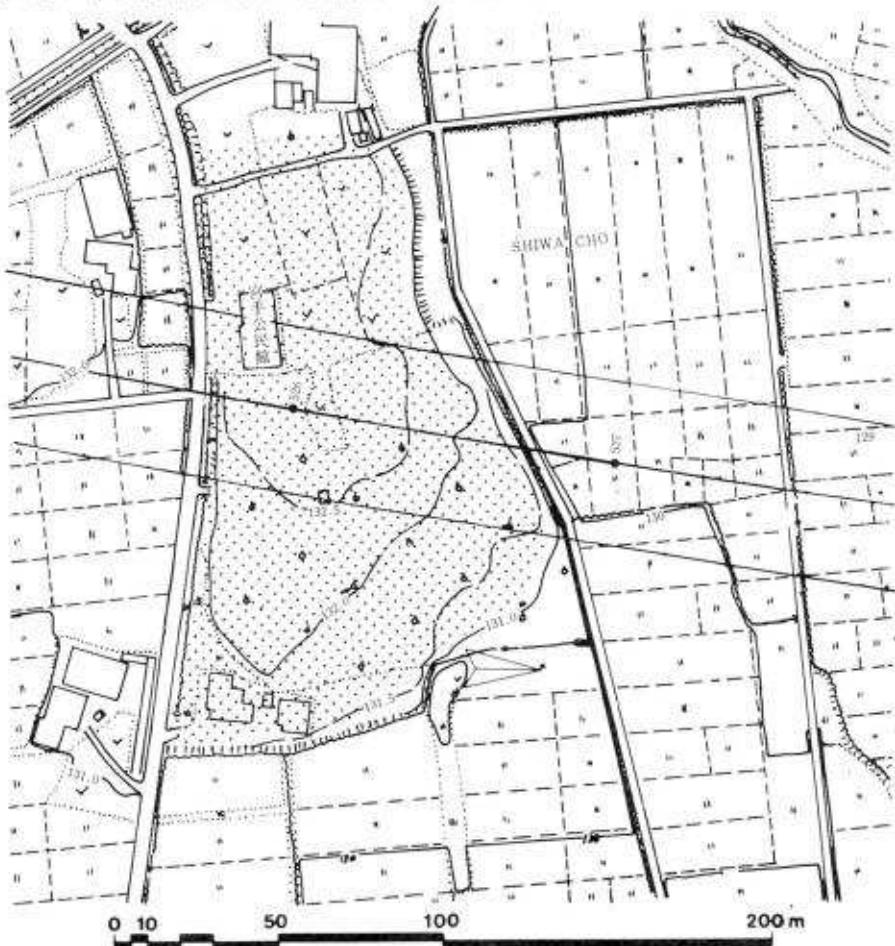
・ 東北新幹線関連

みや
宮 手 遺 跡

I 遺跡の位置と立地

宮手遺跡は、紫波郡紫波町宮手字朴田24-4に在り、国鉄東北線日詰駅の北西約4.6kmの所である。陣ヶ岡の北側を東流し、五内川に注ぐ2つの灌漑用水路に挟まれた微高地で、陣ヶ岡の西上流約700mの地点にあり、東西約200m、南北約90mが遺跡である。

遺跡の現状は、果樹園と畠地。南西隅から西路線外に宮手公民館があった。調査地区は、この遺跡のは、中央を南北に貫ぬく。標高は132m前後で、北端は比高約1.5mの段丘崖である。



第 I 図 遺跡地形図

II 調査の経過

宮手遺跡は、調査以前に既に宮手朴田遺跡（経塚）として登録されており、遺跡の東端に、天保・安政・明治の墓石と共に、次のような石碑がある。

能化山安徳寺古趾
開基 淨圓法師 俗名 藤原朝祐
建立 土御門天皇 承元元年
経塚 焼滅 後陽成天皇 慶長五年
焼滅 時經文ヲ石檻ニ入レテ此
地ニ埋ム 依リテ經塚ノ名アリ
大正六年正月廿五日建立

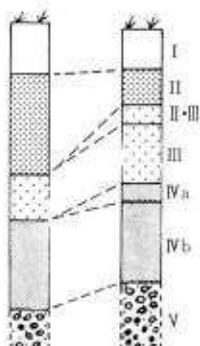
調査は、第1次。構造物（ボックス）基礎部分と、代替道路分。昭和49年9月26日～9月30日。10月21日～11月27日。遺跡の南端、道路沿い、東西50m、南北25mが調査され、竪穴住居跡1棟。溝状土壙5基が検出された。第2次は、西側工事用道路と、北端構造物（ボックス）基礎部分。昭和50年3月10日～3月31日。工事用道路分は、東西17m、南北65m。構造物基礎部分は、東西50m、南北15mが調査され、竪穴住居跡3棟。溝状土壙3基。方形周溝1基、ピット約10基。溝2条が検出された。第3次は、本線分全面発掘で、昭和51年4月5日～6月25日。竪穴住居跡9棟・溝状土壙21基・土壙8基・焼土遺構4基・ピット2基が検出された。

調査に際し、設定した座標は、526+00と、526+20を通る直線を南北基準線、526+00を基準点とした。基準から北30m迄をB区、それ以北をA区、基準点以南をC区とした。各区は基準線（N-10.5°-E）を境に東西各1ブロック、30m×30mになる。また、各ブロックを3m四方

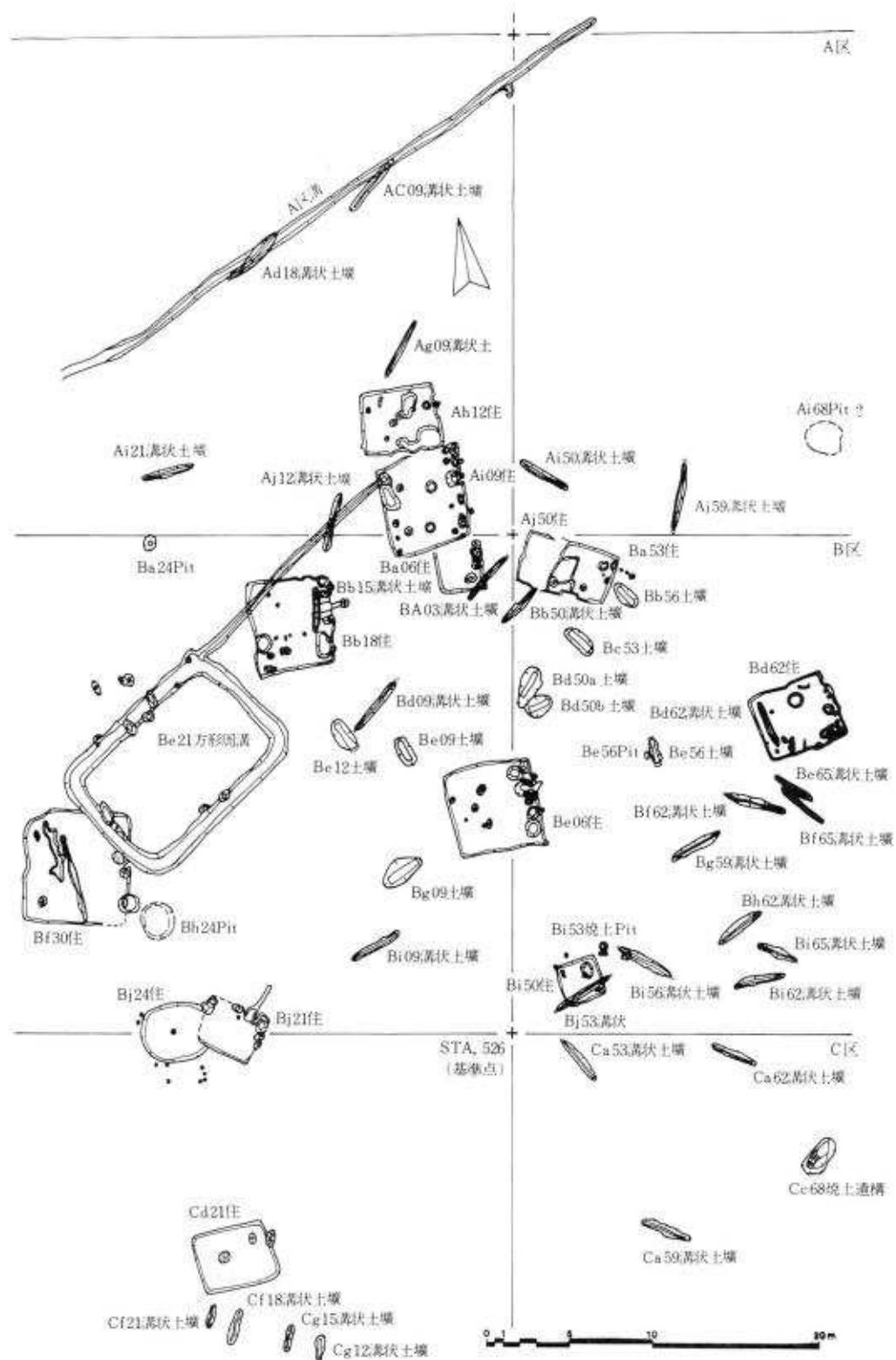
のグリッドに細分した。

レベルは、遺跡の南東側水田中の標高基準点131.351mを利用した。遺構の精査は4分法、その他の遺構は2分法で実施し、堆積土・遺物の包含層・位置等を明確にした。住居跡を4分した際、北東部をQ1、北西部をQ2、南西部をQ3、南東部をQ4とした。また最近の農作業等による擾乱の箇所があり、底面まで掘り下げ確認した。

基本層序（第2図）、東端を南北に深掘りをし測定した。第2図左側はN30m地点である。右側はN23m地点である。I層10YR 3/4暗褐色腐植土。II層10YR 4/6黃褐色シルト。III層10YR 4/6黃褐色砂。IVa



第2図 基本層序



第3図 宮 手 遺 跡 遺 構 配 置

— 宮 手 遺 跡 —

層10YR 5% 黄褐色粘土。W b 層10YR 5% 明黄褐色粘土。V 層10YR 5% 暗褐色基底砂礫層。第2図は縮尺1:30。

III 発見された遺構と遺物

1 住居跡

住居跡は、計13棟検出され、内1棟は縄文時代早期末と思われる。他の12棟は平安時代のものと思われる。

(1) Bj24住 (第4図)

〔遺構の確認〕 基準線より西へ18.24m～22.4m。基準点より北へ1.83m、南へ1.75mの地点 Bj24地区及びその周辺に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色シルト質土である。(第2次調査)

〔重複・増改築〕 住居跡の東壁は、Bj21住(平安時代)によって、上部が切り合っている。また、ピットNo.11は、住居に伴うものかどうか断定はできない。伴うものとしても性格は不明である。北東側のピットは、Bj21住に伴うものと思われる。

〔平面形・方向〕 やや円形で、北壁がほく直線で長い。東西約4.1m、南北3.35m。壁高は、16cm～23cmである。主軸方向は、炉や出入口が検出されず計測基準になるものがないので不明であるが、ほく東西に長い事から、ほく南北方向を向くのではないかと思われる。

〔堆積土〕 床面上は4層に分かれ、壁沿いにシルト質土がもう一層確認された。

I層 10YR 5% 黑褐色腐植土層、粗で粘性なし、炭化物、焼土を少量含む。

II層 10YR 5% 黑褐色腐植土層、粗で粘性なし、炭化物少量を含む。遺物包含層。

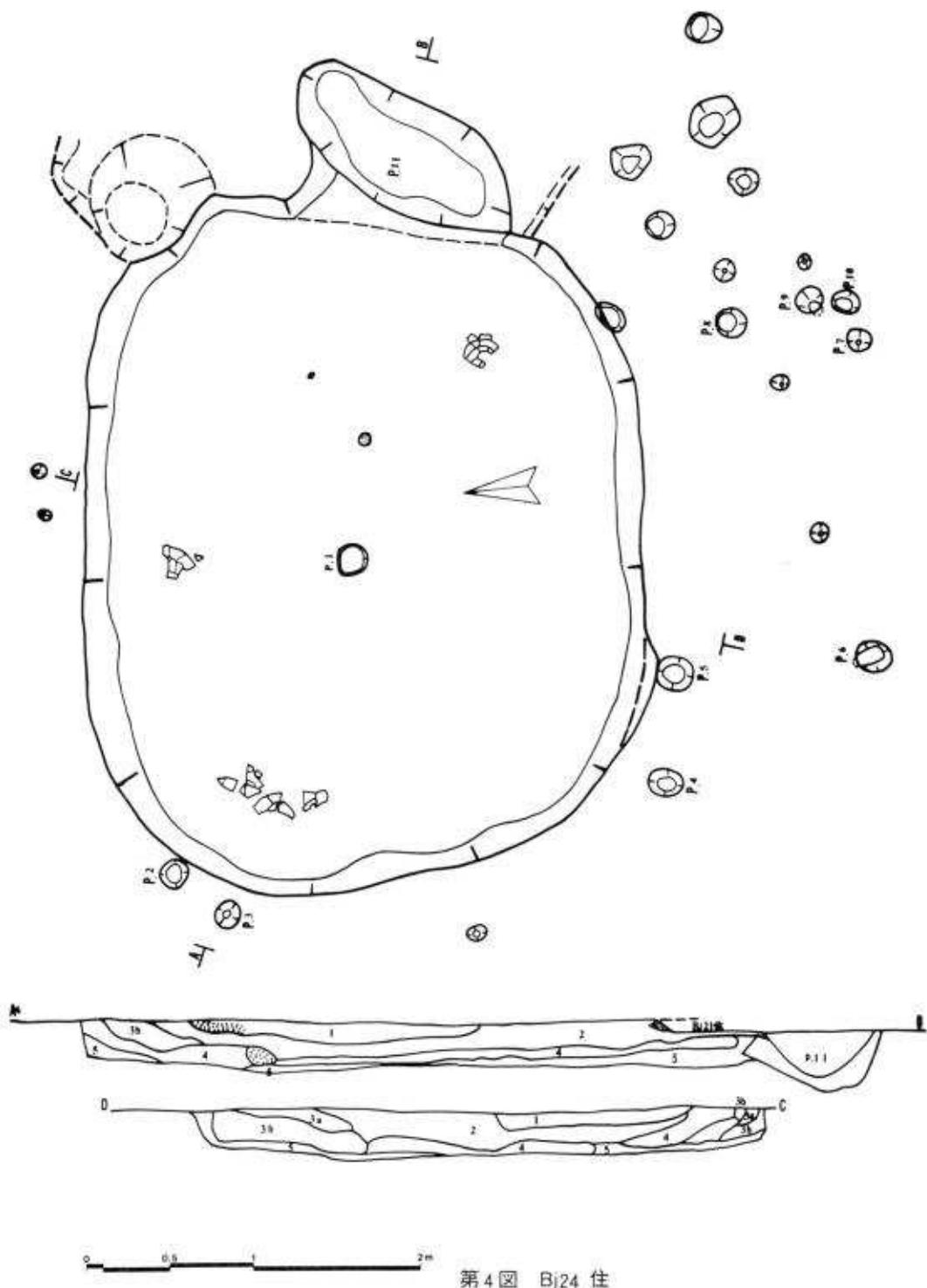
III層 10YR 5% にぼい黄褐色シルト層、粗で粘性なし、腐植土を含む。

IV層 10YR 5% 黑褐色腐植土・シルト混合層、粗で粘性なし、遺物包含層。

V層 10YR 5% 暗褐色シルト・腐植土混合層、粗で粘性ややあり、遺物包含層。

〔床面〕 ほく平坦であるが、壁際から床面中心部へ徐々に深くなり、比高は約10cmである。

〔柱穴〕 床面ほく中央に、主柱穴がある。上場径19cm、下場径17cm。深さは床面下約10cmである。埋土はなく中空で、底面は砂層であった。水が湧き出しており底面が平坦か細くなるか不明である。壁外に20余の小ピットがあり、柱穴と思われるものが9基確認された。(ピットNo.2～No.10) 北西側に2、南西側に3、南東側に4で、北側と東側は確認されなかった。9基以外のピットは、周囲のシルト質土が、しまりが強く、柱穴の輪郭が明らかで、底部先細りの形状で、杭穴状をしている。(第1表参照)



第1表

(単位: cm 径は東西×南北)

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11
位置	床面中央	北壁外	北壁外	南壁外	南壁外	南南西壁外	南壁外	南南東壁外	南南東壁外	南南東壁外	東壁外
上場径	19	18	18×5	16×22	21×12	18×23	14×15	17	16	14×17	65×140
下場径	17	10	5	8×12	11×14	8×20	4	12×10	8×7	7×11	40×114
深さ	39	6	16	17	17	10	16	10	8	8	39
埋土	—	黒色 腐植土									
性格	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	柱穴	不明

〔かまど・炉〕なし。

〔その他の施設〕なし。

〔年代決定資料〕縄文土器片がⅡ層～V層に多数包含され、石器は主にⅣ層～V層に包含されていた。土器片は、纖維を含み、中にはⅡ層からV層に跨る破片もある。壁際に3カ所集中して出土し、石器は床面中央から出土したものが多く、凹石2点。縦形石匙5点。石鏃無茎4点。搔器1点。石鎧状石器2点。有孔石器1点。加工痕ある剝片1点。剝片41点である。

出土遺物

縄文土器（第5図・第6図）

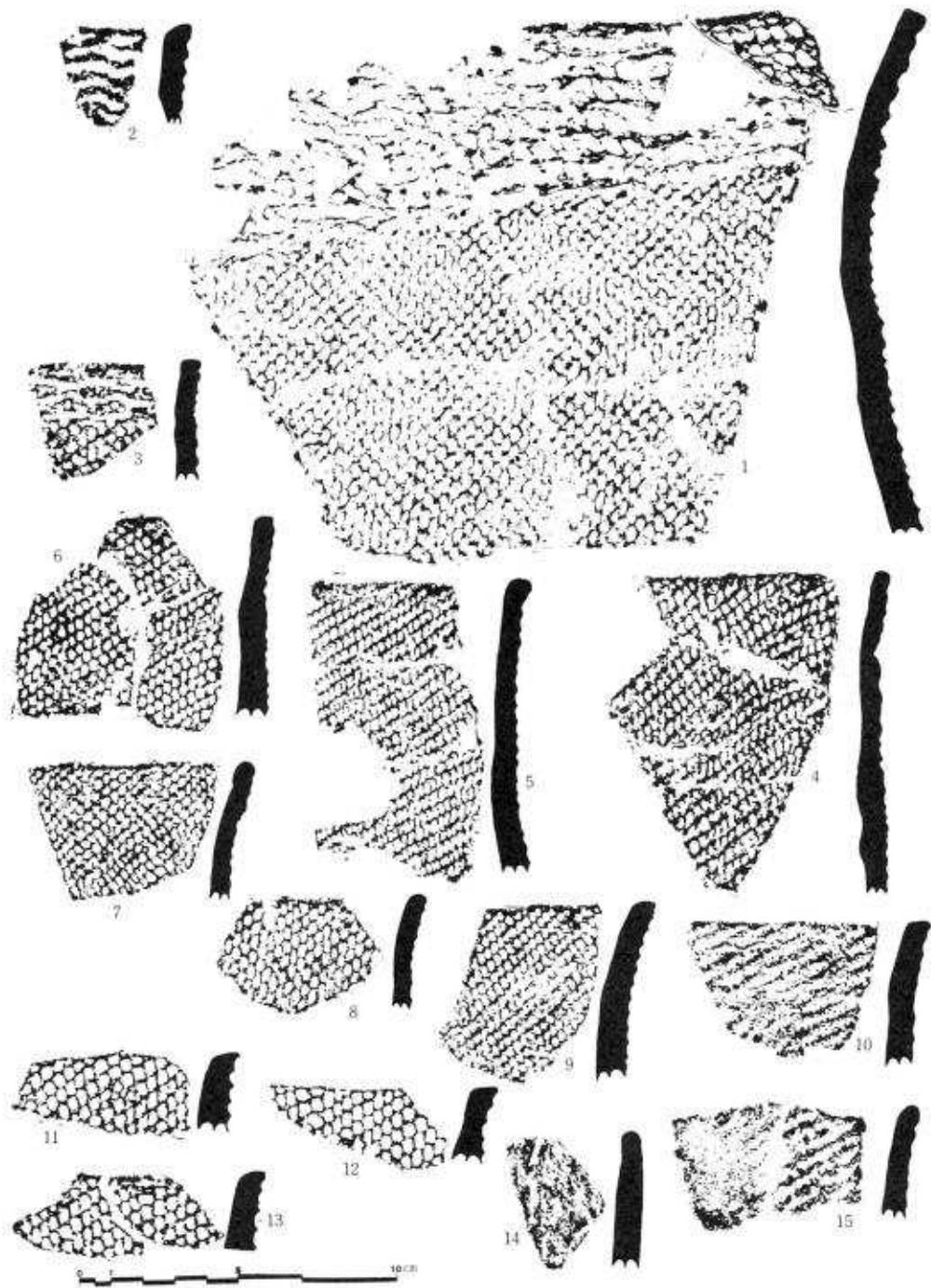
早期末と思われるもので、胎土に纖維を含んでいる。口縁部23点。体部145片。体下半部19片。底部3点で、底部は3点共尖底である。器形は、完形品がないので不明であるが、深鉢と思われる。口縁部も破片のみで口径等実測は不能である。口縁部23点中3点は、不整然系紋が施され(5図1～3)、他は単節または複節の斜縄文(L-R)が施されている(5図4～15・6図16～22)。複節の斜縄文が大部分で、単節のもの(6図24)は少ない。縄文は太目のものが大部分であるが、かなり細かいもの(6図20・21・24)もある。

口縁部は、やや外反するものと、ほく直線的なものがあり、前者は6点、後者は16点である。口端部は、平坦になでたものと、小波状口縁(6図20・21)のものがみられる。口端部断面は、平らなもの(5図1・3・4・5・10・12、6図18・22)と、丸みのあるものに分けられる。いずれも口縁部と体部の境は不明瞭である。

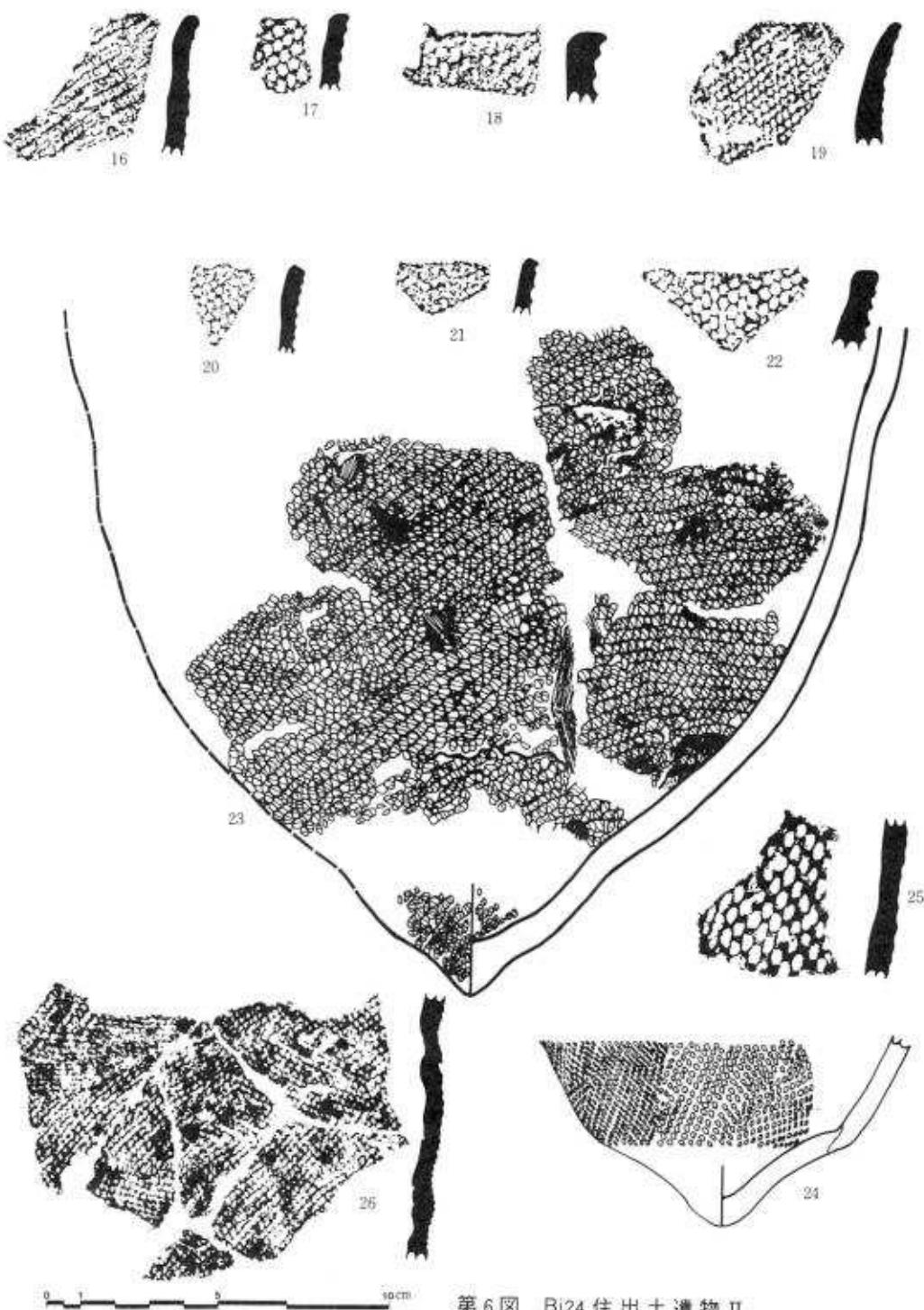
体部の破片は、大部分直線的で直立し、外面は斜縄文で、羽状のものは1点のみである。胎部にはかなり纖維を含み、内外面にも露出している。全破片がL-Rである。(6図25・26)

体下半の破片は、2次焼成を受け剥離した部分が多く、外面に煤かタール様の黒色付着物のあるものや、内面に焦げ付いたと思われる炭化物のあるものがみられる。いずれも丸みをもち外傾している。

底部(6図23・24)は、尖底で、他に1点小破片がある。23は、体下半部から底部までの破片で、IV層から出土した。底部下端から3cm～5cmの間が、縄文を磨り消し、やや凹んでいる



第5図 Bj24住出土遺物Ⅰ



第6図 Bj24住出土遺物Ⅱ

のが特徴の様である。24は、完全に底部の縄文を磨り消して成形している。

以上の事から、縄文土器片は、いずれも纖維を含む尖底深鉢形の土器で、煮炊きをしたものと思われる。従って破片中、底部破片の少ないので、2次焼成によって変質し、脆くなってしまったためと考えられる。

尖底深鉢形と思われる土器片は、調査地区内の表土、及び各遺構の第1層から、かなり出土しており、調査地区外にも遺構の存在する可能性があり、29基の溝状土壤についても、そのいずれかは、この土器片との関連も考え得る。

石器（第7図・第8図）

下の第2表の如く、凹石（7図1・2）。搔器（8図12）。石鎧状石器（8図13・14）。石匙（8図7～11）。石鐵（7図3～6）。有孔石製品（7図15）。加工痕ある剝片（7図16）。剝片等41点が、床面ほ、中央の埋土、及び床面から出土した。

凹石1は、表面がざらざらした灰色の石器で、上下面の他に側面にも3カ所、打痕と思われる凹みと、ひび割れがみられる。2は、表面がかなり風化した浅黄橙色と黒色の石器で、かなり小形である。上下面のみに打痕の凹みがある。

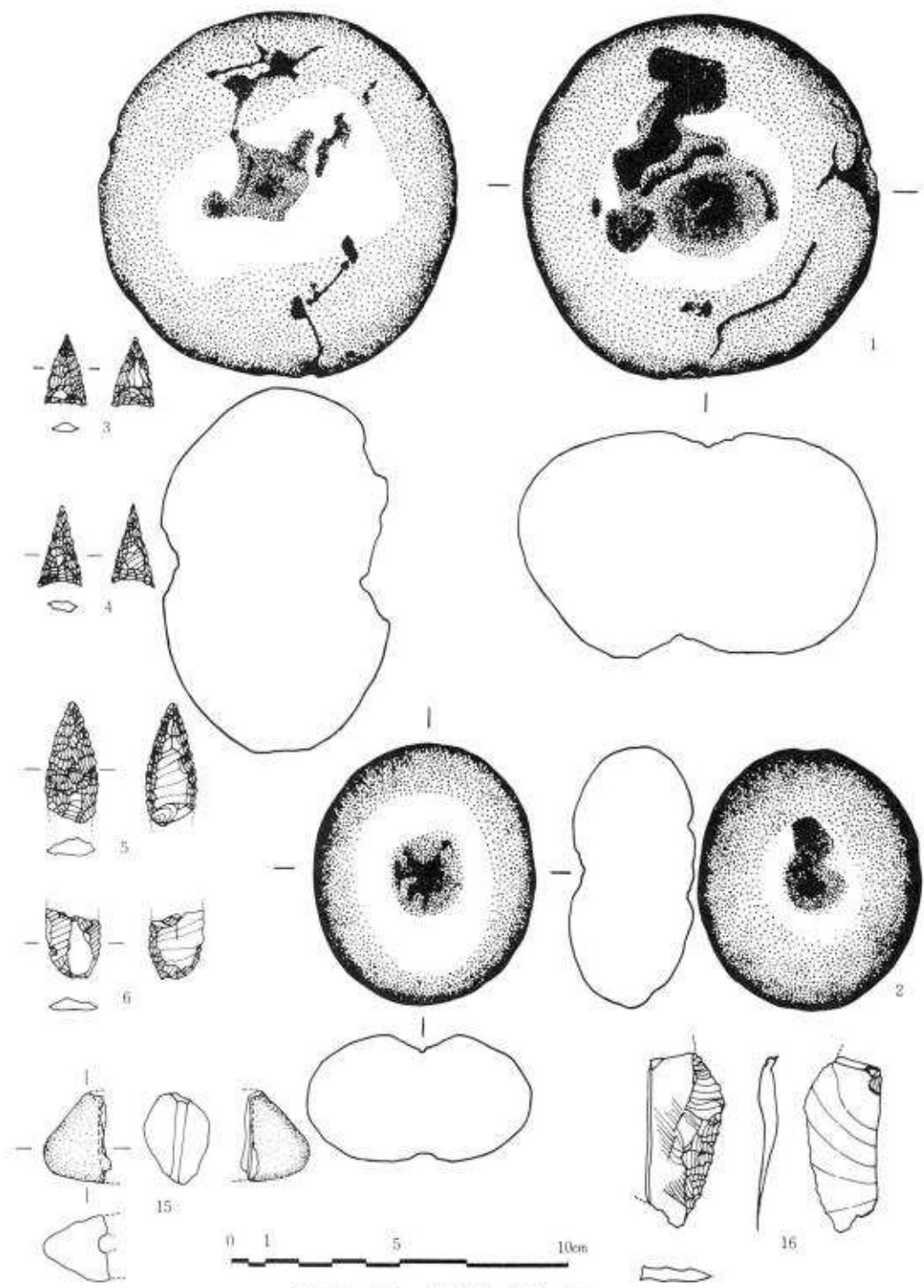
搔器と思われる石器12は、先端がかなりb面方向に屈曲し、a面のみに加工痕がある。b面右辺に一部使用痕らしき剝離がみられる。断面は低い山形をしている。

石鎧状石器13のa面は、大雑把な剝離加工で、b面左辺のみ緻密な加工痕を施している。褐灰色の小形な石器である。14は、一方の先端部が欠損し、全容は不明なため、石鎧状かどうか不明である。一方の先端が尖り、13よりは緻密な加工を施している。13よりやや白っぽい褐灰色で、更に1回り小形である。断面は13が四辺形、14が低い山形である。

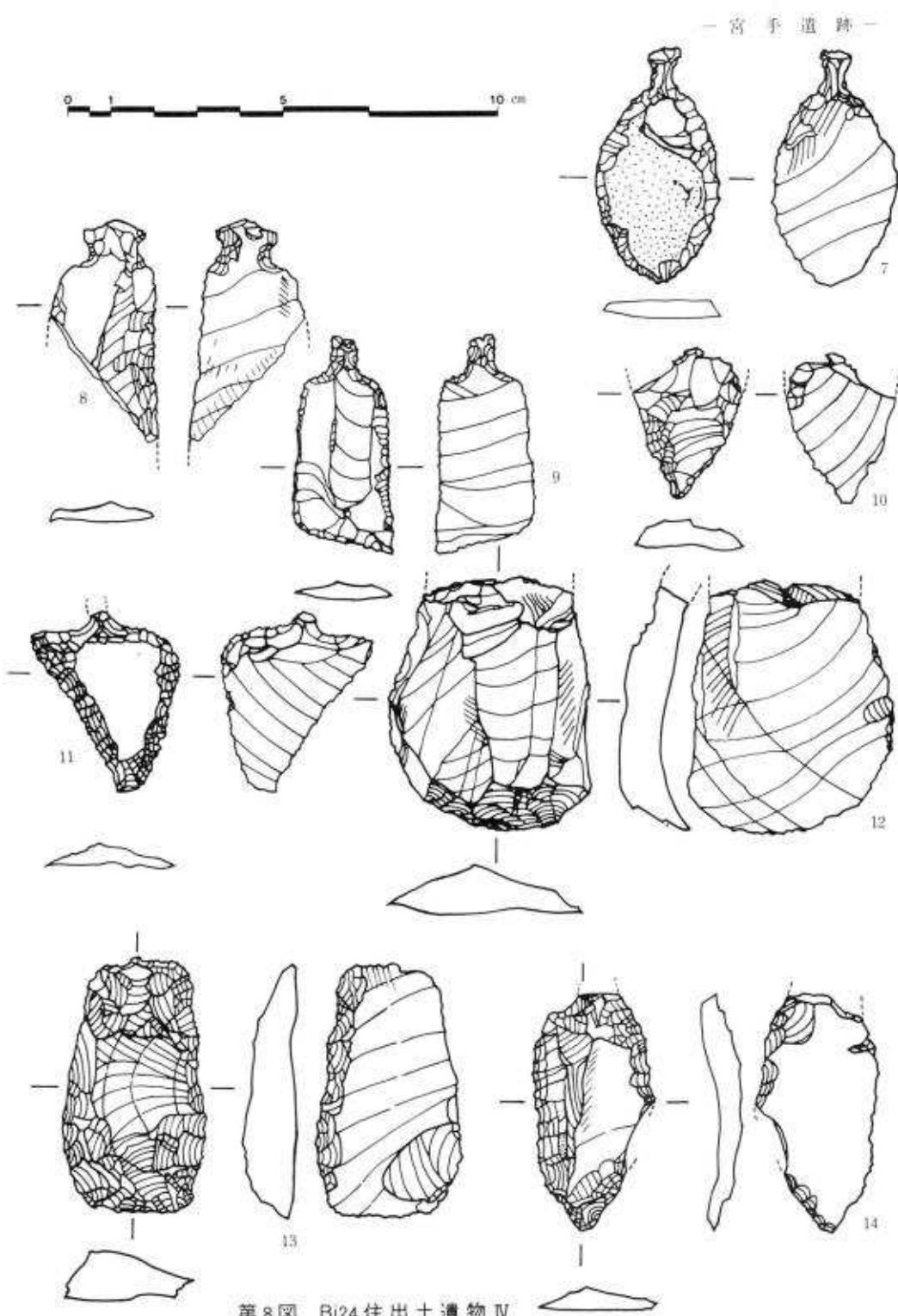
石匙は5点共縦形で、7の平面形は木葉形左右対象に近い。a面の中央部は自然面である。褐灰色で、断面は低い台形状である。8のa面左半分は自然面で、つまみが黄色、下半部の赤

第2表 石 器 説 明

発掘 番 号	器 物 名	種 别	形 状	部 位	出 土 地 点	最 大 尺 (cm)		重 量 g	a面調整	b面調整	材 料
						幅	幅				
7-1	16-1	凹 石 1	偏平球形	完 整	H:24cm	10.8	10.6	6.8	780	(印5枚)	(印 3 枚)
7-2	16-2	+	2	+	-	7.8	6.6	3.8	231	+	+
8-12	16-12	搔 器 1	上 手 欠	+	Q1床 (5.9)	4.6	1.2	42	无 捻	右一部使用痕	フリント
8-13	16-13	石鎧状石器 1	完 整	+	Q1床 (6.0)	3.3	1.2	29	全 邊	左・右・一 部	硬質泥質
8-14	16-14	+	11	生 鮎 欠	Q1床 (5.5)	2.8	0.6	20.6	+	右	同
8-7	16-7	石 鍔 1	鍔 形	完 整	Q3床 (5.5)	2.9	0.4	8.4	+	左	同
8-8	16-8	+	2	+	先 欠	Q3床 (2.5)	1.3	0.3	7.0	+	左
8-10	16-10	+	3	+	上 つまみ 欠	Q1床 (3.4)	(2.5)	0.6	5.0	右・左・先 左	一 部
8-11	16-11	+	4	+	下 つまみ 欠	Q3床 (4.2)	3.3	0.55	8.7	全 邊	左右上辺つまみ
8-9	16-9	+	5	+	完 整	Q3床 (4.8)	2.4	0.4	6.0	+	+
7-3	16-3	石 鍔 1	鍔 形	+	Q1床 (2.1)	1.25	0.25	0.8	+	全 邊	硬質泥質
7-4	16-4	+	2	+	+	Q1床 (2.5)	1.3	0.3	0.8	+	同
7-5	16-5	+	3	+	半 欠	Q1床 (3.6)	1.6	0.5	0.5	+	同
7-6	16-6	+	4	+	+	Q1床 (2.0)	(1.65)	0.4	1.6	右一部	左・右・一 部
7-15	16-15	有孔石製品	+	+	塊土 (1.9)	(2.7)	1.9	6.0	-	-	推測石安山岩
7-16	16-16	アーチーク 1	+	+	Q1床 (5.2)	(1.3)	0.4	6.0	右辺全	左・後用 帽	硬質泥質



第7図 Bj24住出土遺物Ⅲ



第8図 Bj24住出土遺物IV

色で、断面は低い山形である。9は、ほゞ長方形でa面右辺下端が尖る。かなり黒色に近い褐灰色で、断面は低い山形である。10は上半部欠損のため、石匙とは断定し得ない。a面左辺先端が尖る。9と同色、断面は低い山形で、台形に近い。11は、三角形状で、先端は先細りになるが、尖らず短い直線状である。灰褐色で、断面は低い山形である。

石鐵、4点共無基で、7図3・4は基部が内湾する。5は基部欠損、6は基部が丸みをもち柳葉形と思われる。3と5は両辺がやや丸みをもち、4は直線的である。3と5は黒褐色、4は灰褐色。6は暗赤褐色である。有孔石製品7図15は、断面やや菱形で暗褐色。剥片7図16は褐灰色である。

(2) Ah12住 (第9図)

〔遺構の確認〕 基準線より西へ4.19m～9.22m、基準点より北へ34.82m～39.1mの地点、Ah12地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第3次調査)

〔重複・増改築〕 南東隅にあるピットNo.5の南側が、Ai09住の北東隅にあるピット5・6と、切り合っており、Ah12住ピットNo.5の南壁は残存しているが、Ai09住ピット5・6の北壁は明確でない。またAi09住の北壁東半分も確認出来なかった事等から、Ah12住の方が、新しいと思われる。

〔平面形・方向〕 方形で、東西4.10m、南北3.35mと、東西がやや長い。各壁は、ほゞ直線であるが、南壁は出入がみられる。主軸方向は、E-5°-Sでは、東を向く。

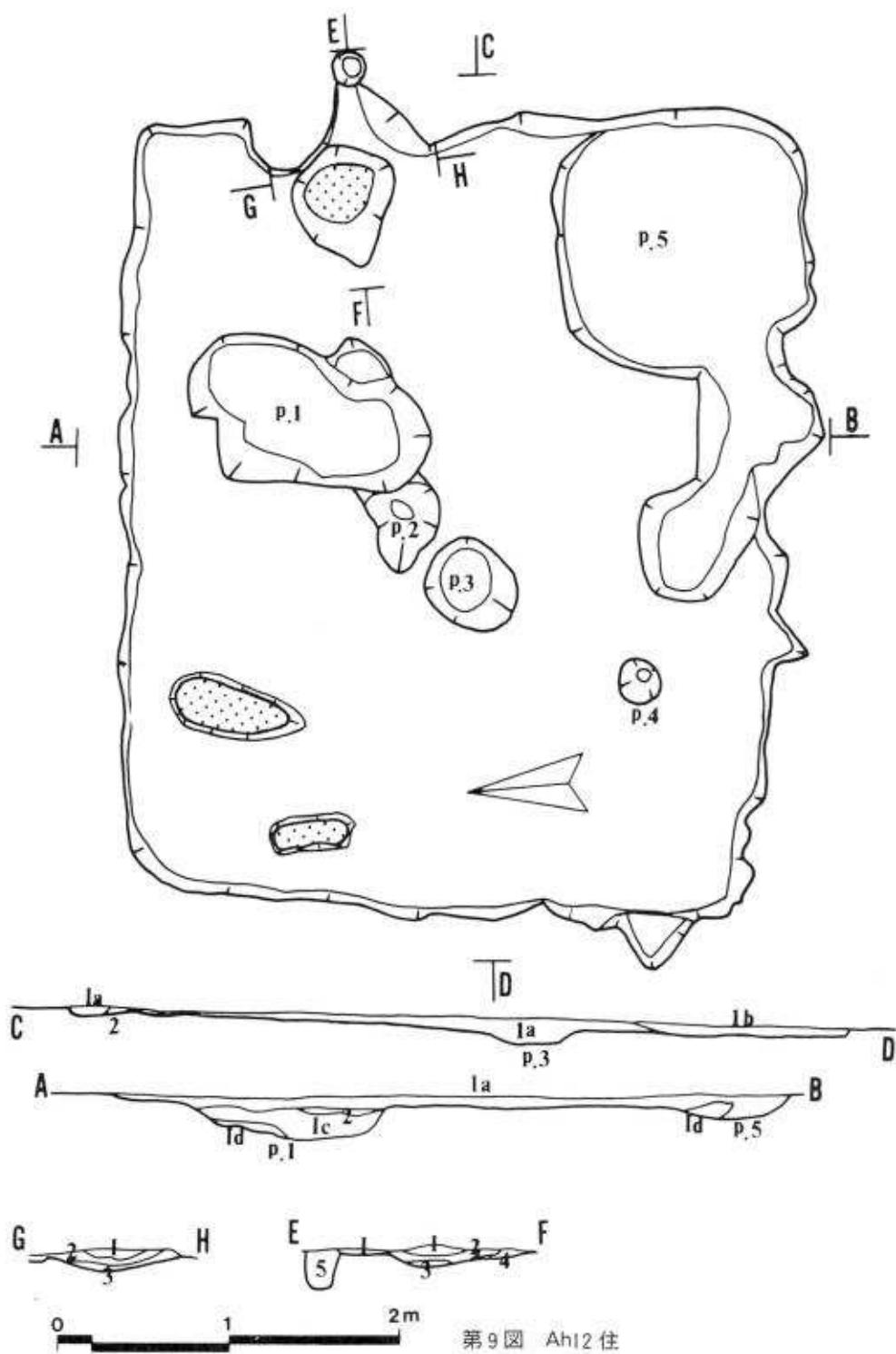
〔堆積土〕 単層で浅い。10YR 4/2 黒褐色腐植土層、密でやや粘性がある。炭化物、焼土、礫、遺物を含む。

〔床面〕 ほゞ平坦で、地山面をそのまま利用している。床面から壁への立上がりは、緩やかな個所が多く、壁高は3cm～4cmである。

〔柱穴〕 確認されなかつた。

〔かまど〕 東壁やや北寄りにあり、燃焼部は、横約80cm、奥行約90cm、深さ床面下約8cmである。煙道・煙出は不明確で、第9図のものが、そうであるとすれば、煙道は長さ約30cm。巾約14cm。深さ4cm。埋土は2.5YR 3/2 暗赤褐色焼土である。煙出は上場径18cm、下場径12cm。深さ22cm。埋土は7.5YR 3/2 黒褐色腐植土で炭化物焼土小礫を含んでいる。袖は両方共欠損している。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは、床面にある5基中No.5と思われるが、明確ではない。ピットNo.1は焼土を埋め込んだ様であり、ピットNo.2は、No.1と切り合いでいる。ピットNo.3は、No.2に近接し、同じ埋土である。ピットNo.4は、柱穴状である。ピットNo.5は、西へ溝状に1.5mほどピットが延びており、南東寄りの底面に甕の破片・縄文時代の磨石・焼土・炭化物が集中して埋め込まれていた。磨石は焼けて一面が剝離している。また甕と同一個体の破片が、かま



一宮手遺跡

ど焚口から出土し接合している。

第3表

ピットNo.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5
位 置	Q 1 かまと手前	ほのく中央	中央やや西寄り	Q 3 南寄り	Q 4 南東隅
規 模	東西 80cm 南北 146cm 深さ 17cm 横円形	東西 50cm 南北 44cm	東西 50cm 南北 55cm 深さ 9cm やや三角形	東西 27cm 南北 26cm 深さ 9cm やや円形	東西 154cm 南北 151cm 深さ 7cm やや円形
埋 土	10Y R 5 黒褐色腐植土 シルト混含 腐化物焼土	10Y R 5 黑褐色腐植土 腐化物焼土若干	10Y R 5 黑褐色腐植土 腐化物焼土若干	10Y R 5 黑褐色腐植土 シルト若干	10Y R 5 黑褐色腐植土 腐化物焼土 遺物

〔その他の施設〕なし。

〔年代決定資料〕土師器は、長胴の甕11点、小型甕2点。須恵器は、环A類2点、环B類19点。磨石1点が出土している。

出土遺物

土師器

長胴甕 (10図1) は、口縁部 $\frac{1}{4}$ 、体上半 $\frac{1}{4}$ 残存で、推定口径約22cm。頸部径約20cm。口縁部高さ1.5cm。体部最大径約22.6cmである。口縁部・体上半部は、横なで成形である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出されている。体部外面中央以下は、へらなでヘラ削りが上下に施され、一部に長さ1cm位の平行叩き目が縦に一列みられる。胎土は軟質で砂粒を含む。色調は淡赤橙色～淡橙色。焼成は良くない。2次焼成を受けている。かまと焚口部と、ピットNo.5底面から出土した。かまとに据え付けていたのが、破損して燃焼部に崩れ落ちたので、ピットNo.5に捨てた可能性があると思われる。

他の10点は、体部破片9点、体下端と底部外縁の破片1点で、1とは \pm 同様の成形技法でつくられたものと思われる。

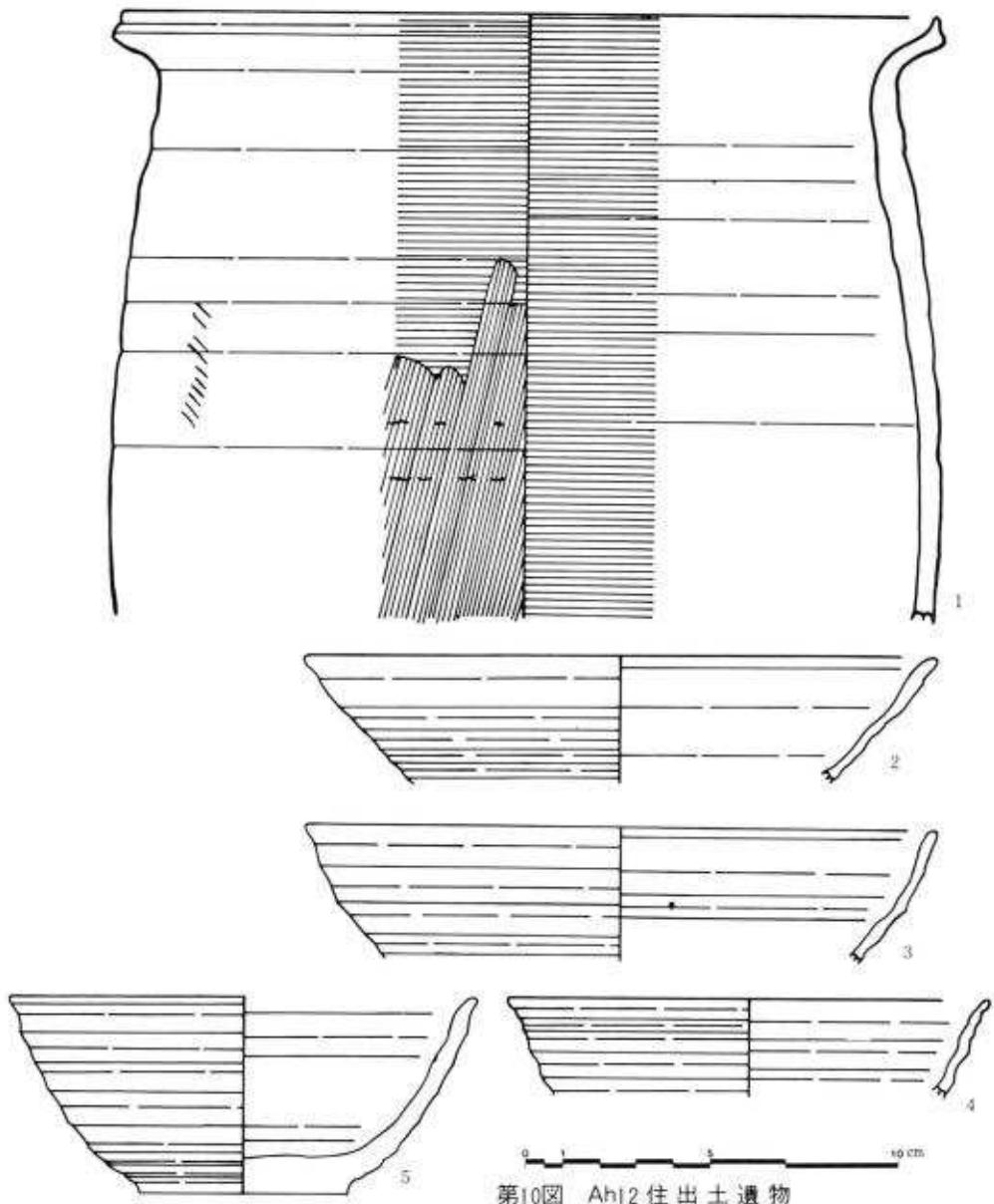
小型甕 口縁部 $\frac{1}{8}$ 以下1点、体下端と底部 $\frac{1}{2}$ の破片1点で、両者同一個体かどうかは不明である。口縁部破片は、かなり外反し、口端部は上に強く挽き出される。Q3床面出土である。体下端と底部の破片は、底径約9cmで歪みが著しい。ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。体下端部外面は、2次焼成を受け大部分剥離している。Q1床面とピットNo.1埋土内から出土した。

須恵器

环A類 2点は口縁部と底部の小破片である。口縁部破片は $\frac{1}{4}$ 以下で、やや内湾する。胎土は硬質、色調は表面がにぶい黄橙色、胎部が淡橙色。焼成は還元炎焼成で良好である。底部の破片は $\frac{1}{2}$ 残存で、回転糸切りである。胎土は硬質砂粒を若干含む。色調は表面が明褐灰色、胎部が灰白色。焼成は還元炎焼成で良好である。

环B類 (10図2～5) 2点は、口縁部体上部 $\frac{1}{4}$ 残存で、口縁部はわずかに外反する。口端部はやや薄くなり丸みをもつ。体壁はほ \pm 直線的で、ろくろなでによる凸凹がある。推定口径約17

cmである。胎土はやや軟質で砂粒を含む、色調は橙色、酸化炎焼成でやや不良である。3は、口縁部体上部 $\frac{1}{2}$ 残存で、口縁部はわずかに外反し、口端部は丸い。体壁はやや丸みをもち、ろくろなでによる凸凹がある。推定口径約17cmである。胎土は軟質で砂粒をかなり含む。色調は淡赤橙色～淡橙色。酸化炎焼成で不良。4は、口縁部体上部 $\frac{1}{2}$ 以下残存で、口縁部はやや外反し、口端部は丸い。体壁はほど直線的で、ろくろなでによる凸凹が著しい。推定口径約13cm



第10図 Ah12住出土遺物

である。胎土はやや軟質で砂粒を含む。色調は浅黄橙色。酸化炎焼成でやや不良。5は、口縁部体部 $\frac{1}{4}$ 、底部全部残存で、口径約12.6cm、器高5.3cm、底径5.6cm。外傾度33°である。楕形で、やや小型である。ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。胎土軟質砂粒を含む、色調は淡橙色。酸化炎焼成で、2次焼成を受ける。他に口縁部7点、体部6点、底部2点が出土しており、いずれも胎土軟質。浅黄橙色～橙色。酸化炎焼成で、ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。主にQ1床面、ピットNo.2出土である。

磨石ピットNo.5から、廃棄された甕の破片と共に出土し、焼けている事から、かまどで、支脚にでも利用したものとも考えられる。

(3) Ai 09住 (第11図)

〔遺構の確認〕 基準線より西へ2.34m～8.32m、基準点より北へ28.68m～35.66mの地点、Ai 09地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第3次調査)

〔重複・増改築〕 南隣りにあるBa06住と切り合いで、Ai 09住の南壁が、Ba06住の北壁を切っている。また方形周溝の北東コーナーから北東に延びる溝が、Ai 09住の北西部に達し、西壁北端を切って、住居跡内に入り、消えてしまう。また北壁やや東寄りと、ピットNo.9の北側には、上層に石を数個埋め込み、針金を下に埋め込んだピットが検出されたが、これはぶどう棚を支えるためのもので、昭和に入ってられた事が判明した。北東部切り合いは前述した。

〔平面形・方向〕 東西5.15m、南北5.60mの方形で、北壁が東へ少しずれており平行四辺形に見える。主軸はほぼ東を向いている。

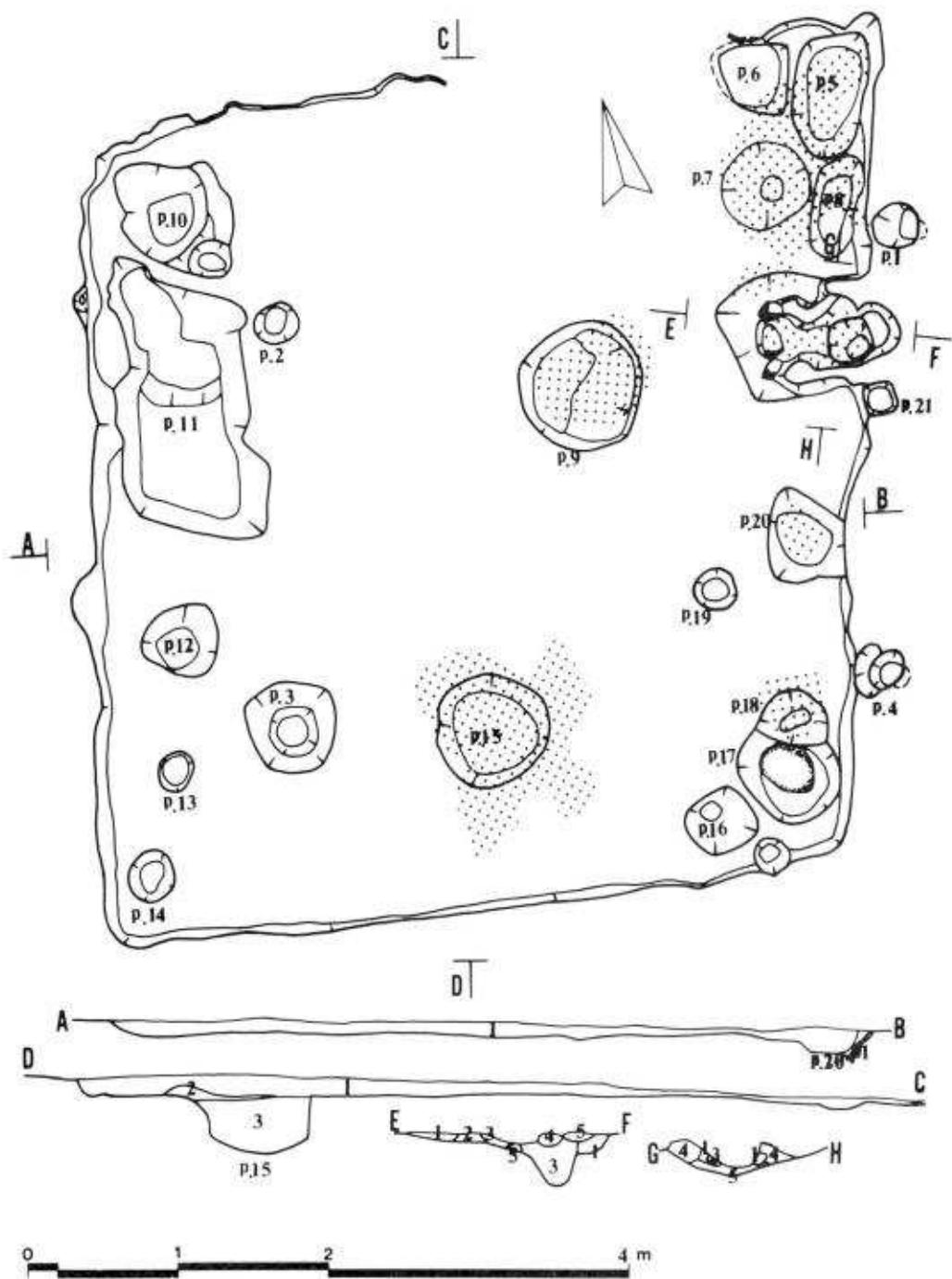
〔堆積土〕 単層で、Ah12住、Ba06住と共に、生活面がかなり削平されたのではないかと思われる。I層10YR 5/4 黒褐色腐植土、密で粘性なし。焼土・炭化物・礫・遺物を含む。

〔床面〕 平坦で、地山面をそのまま利用している。床面から壁への立ち上がりは、緩やかな所が多く、壁高は5cm～12cmである。

〔柱穴〕 ピットNo.1～4で、1と4が、東壁の外に在り、西に傾斜している。

〔かまど〕 東壁中央やや北寄りにつくられ、燃焼部は横15～25cm。奥行75cm。深さ約8cm。底面東端にピットNo.22がある。煙道・煙出しは確認されなかったが、燃焼部東端の張り出し部が煙出しあもしれないが、明確ではない。袖は両方共若干残存し、長さ約50cm。巾20～30cm。床面からの高さ約6～8cmで、両先端に各1個礫が据えられている。燃焼部堆積土は、I層5YR 3/4 暗赤褐色焼土。2層10YR 5/4 暗褐色腐植土シルト混合土。3層10YR 5/2 黒褐色腐植土。4層10YR 5/3 暗褐色腐植土シルト混合土。5層7.5YR 5/4 暗褐色腐植土焼土混合である。(第11図参照)

〔貯藏穴〕 貯藏穴状ピットはNo.5～8、17・20と思われ、遺物が多く包含されていた。9と



第11図 Ai-09 住

— 宮 手 遺 輛 —

15は、焼土が多量に堆積し、遺物も若干含まれている。10と11は底面が掘り方状で、境が無く続いているのかもしれない。

第4表

(単位: cm � 径は東西×南北)

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
上場 径	31×30	30×28	32×33	33×36	48×69	43×40	59×58	33×69	86×85	60×64	80×160
下場 径	18×17	14×19	23×21	20×16	35×60	35×60	15×18	19×46	67×73	30×32	55×130
深さ	37	56	57	51	約 20	約 20	10	10	26	28	15
堆積土	腐植土	腐植土	腐植土	腐植土	腐植土 焼土	腐植土 焼土	腐植土 焼土	腐植土 焼土	腐植土 シルト	腐植土 シルト	
種別	主柱穴	主柱穴	主柱穴	主柱穴	貯藏穴	貯藏穴	貯藏穴	貯藏穴	焼土埋込	不明	不明
ピットNo.	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
上場 径	50×50	23×28	32×35	74×77	49×47	70×90	44×37	30×28	52×60	21×21	30×30
下場 径	29×29	19×22	16×24	58×56	15×14	46×48	22×11	20×16	37×35	16×16	15×18
深さ	4	10	13	36	17	11	10	11	23	30	56
堆積土	腐植土 シルト	腐植土 シルト	腐植土 シルト	焼土	腐植土	腐植土	腐植土 シルト	腐植土 焼土	腐植土 シルト	腐植土 シルト	
種別	不明	柱穴状	柱穴状	焼土埋込	貯藏穴か	貯藏穴	貯藏穴か	柱穴状	貯藏穴か	柱穴状	かまど

〔その他の施設〕 なし。

〔年代決定資料〕 土師器は、長胴甕128点、小型甕46点、内黒甕11片、内黒杯55点、内外黒杯9点、浅鉢1点、須恵器は、壺5点、甕1点、環A類9点、環B類289点、高台環5点。以上が出土している。主にピットNo.5・6・17・20・22からである。

出土遺物

土師器

長胴甕 (12図1~5) 1は、口縁部、体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出されている。体部はほど直立し、わずかに丸みをもつ。器壁外面は横なので、残存部下半は、その後縁にへらなでしている。内面も同様である。胎土軟質砂粒をかなり含む。色調は淡橙色、焼成は良くない。Q2・Q4床面出土である。2は、口縁部、体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上にやや挽き出されている。体上部はほど直線的で内傾する。残存部下端に丸みがある。内外表面共横なで成形である。内面に炭化物が付着している。胎土やや軟質砂粒を若干含む。色調は橙色、焼成はやや不良。ピットNo.15埋土内出土である。3は、口縁部、体上部 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上下に強く挽き出されている。体部はほど直立し、やや丸みをもつ。口縁部は内外表面共横なので、体壁は上端が横なので、その下は縦のヘラなのである。外面に窓などの際、刃先が引掛かった痕がみられる。体残存部下半外面に焼土がかなり付着している。体部内面は大部分磨滅していて、なでの方向は、一部しか認められない。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色。焼成はやや不良である。ピットNo.22出土である。4は、口縁部、体上端 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上下に強く挽き出される。体上端はほど直線的で、やや内傾する。内外表面共に横なのである。外表面に焼土が若干付着し、内表面も若干焼土が付着している。口縁部内面の一部

に煤様の炭化物が付着している。胎土やや軟質砂粒を若干含む。色調は浅黄橙色。焼成はやや不良である。5は、1~4に比べ、かなり小型である。口縁部、体上端 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はやや外反し、口端部は薄くなる。体壁はわずかに内傾し、やや丸みをもつ。口縁部は内外面横なでであるが、かなり凸凹と歪みがある。体部外面は縦に範なで、内面は横とやや斜めに刷毛目痕が認められる。胎土は軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい橙色。焼成は不良。かまど燃焼部出土である。その他の小破片は、口縁部3点、体部111点、体下底部5点、底部4点で、口縁部は、3点共かなり外反し、口端が上に挽き出されている。体部は外面、上半が横なで下半は窪削り範なでが大部分。内面は横なでが大部分で、一部刷毛目のものがある。1点体部から底部外面まで叩き目痕のあるものがみられる。底部破片では、範なでのものが大部分で、1点木葉痕のものがある。

小型甕 (12図6~9) 6は、口縁部体上半 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出される。体上部はほく直線的で、やや内傾している。残存部表面はみな横なでである。この器形の中では最も体壁が厚い。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は淡橙色。焼成は良くない。ピットNo.20出土である。7は、口縁部体上部 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はほく 90° 外反し、口端部は強く上に挽き出され薄くなる。体上部はほく直立し、ろくろなでによる凸凹がみられる。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色~橙色。焼成は不良である。Q3床面出土である。8は、口縁部体上部 $\frac{1}{2}$ 以上残存である。7とは同形で、成形も同じである。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は褐灰色に近いにぶい橙色である。焼成はやや不良。ピットNo.8出土である。9は、体下半 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存で、体下半はかなり丸みをもち、一見壺形に見える。底部は、体壁に比べ厚く外底面は、回転糸切りである。体部外面に、何か煮零れた様な黒色の滴り痕が縦に5条ほどみられる。ろくろなで成形無調整である。胎土軟質砂粒を若干含む。色調は淡橙色。焼成は不良。ピットNo.22出土である。その他の小破片42点は、口縁部7点、体部30点、底部5点で、大部分がろくろなで成形無調整、回転糸切りである。例外は2点あり1点は、口縁部がやや外反し、口端部は薄くなり、外体面は、上端から窪削り範なでが斜めになされたもので、かなり砂粒を含んだ破片である。もう1点は小破片で磨滅しているため明確ではないが、凸凹歪みが著しく、ろくろなで成形とは思われないものである。

浅鉢 (12図10) 報告書等に、鍋とか盤という器形名で掲載されているものと類似する。环類に比べかなり大型である。口縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に挽き出される。体壁は丸みをもちかなり外傾する。口縁部内外面の一部が黒色で磨きは認められない。全面横なで体部外面の一部が縦なでである。ピットNo.5出土である。

内黒坏 (13図1~11) 大部分が口縁部と体上半部のみの破片で、体下半までの破片は12図5だけである。1・2・3・6・8が口径13cm以下。他は14~15cmである。口縁部外面にも黒色処理

一 宮 手 遺 跡

が認められるが、磨きは明確ではない。1はQ1・Q3埋土。2・8はQ2床面。3はQ2埋土。4はかまど焚口。5・7はピットNo.152層。6はQ3床面。9はピットNo.10。10はQ1床面。11はQ3埋土出土である。尚11は外体面に墨書が認められ、「田」と思われる。

その他、小破片44点が出土しており、口縁部16点。体部24点。体下・底部4点である。口縁部破片の内11点は、外面にも黒色処理がみられ、11点中1点に磨きが認められる。体下・底部4点はいずれも回転糸切りで、3点中2点は体下端外面に範削り調整があり、2点は調整がない。

内外黒色処理壺 9点出土しているが、いずれも小破片で全容不明、実測不可能である。口縁部4点、体部5点で、口縁部が外反するもの3点、直線的なもの1点である。体部破片はいずれもやや丸みをもっている。どの破片共外表面横磨き黒色処理である。

内黒甕 11片出土したが、1個体分か2個体分と思われる。体上半部破片が5片。体下半が5片。底部が1片である。体上半部は外面が横なで、内面が横磨き黒色処理。体下半部は外面が左上→右下と斜めに範削り範なで。内面は縦に磨き黒色処理。底部は上面が放射状磨き黒色処理。下面是不定方向に範なでが施されるが凸凹がかなりみられる。胎土はやや軟質砂粒を含む。色調はにぶい赤橙色～にぶい橙色。焼成やや不良。Q3埋土、Q4床面、ピットNo.17出土。

須恵器

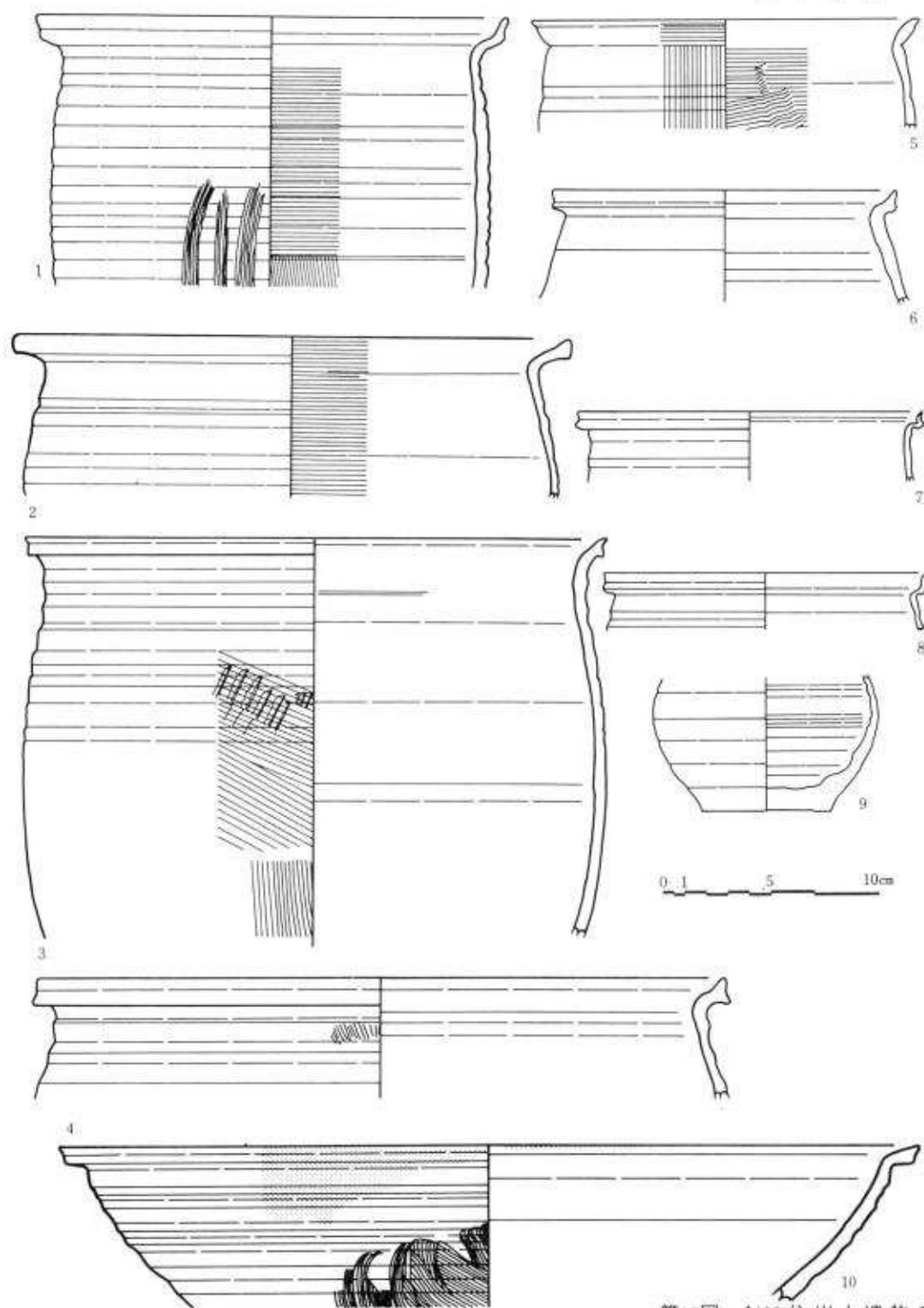
壺 5点出土しているが、みな小破片である。口縁部2点、体部3点で、口縁部破片は2点共かなり外反し、口端は強く上に挽き出されている。内面に灰釉が付着する。体部破片のうち1点は、外面平行叩き、内面波状の叩き。他の2点は内外面共横なでである。Q2床面より口・体各1点、Q3床面より口・体各1点、かまど燃焼部より体部1点出土である。

甕 体下半身残存の破片で、壺のように体部に丸みがなく、ほく直線的で、わずかに外傾している。但し体上部口縁部欠損し、断定はできない。外面は範削り範なで、内面は横と斜めになでが認められる。胎土硬質、色調にぶい黄橙色、焼成良好。かまど燃焼部出土である。

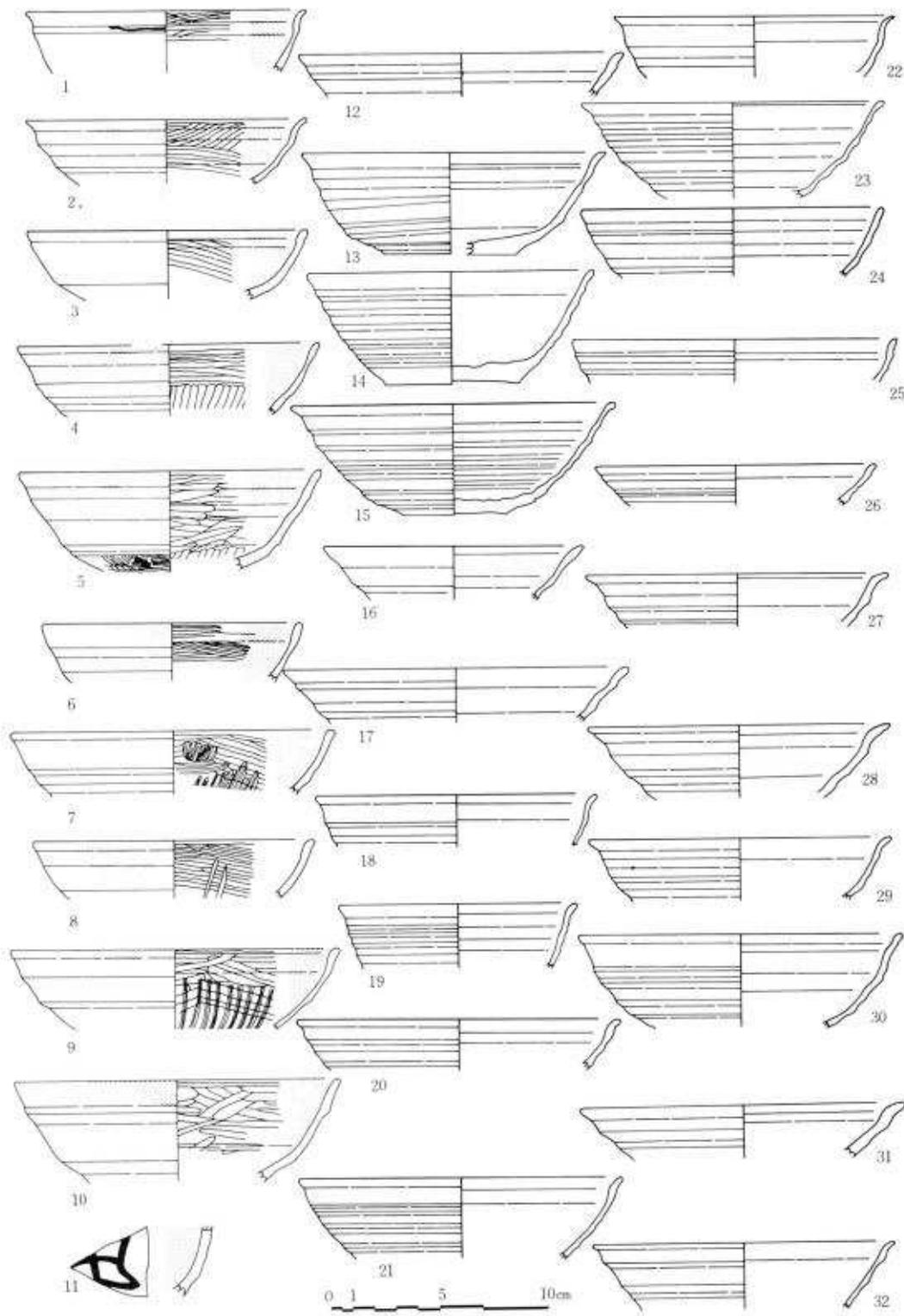
壺A類 (13図12) 9点出土したが、口縁部5点。体部3点。体下底部1点である。いずれもろくろなで成形無調整、回転糸切り、還元炎焼成で、胎土硬質～やや硬質。色調は灰色～灰白色で、12はQ4床面。ピットNo.17より体下底1点。ピットNo.20より口縁部1点、Q1埋土より体部1点、Q3床面より口・体各1点。Q4床面より口縁2点体1点の出土である。

壺B類 (13図13～32・14図1～18) 口縁部112点。体部158点。体下底部19点が出土した。口縁部は、内黒甕や壺A類に比べ外反する場合が多く。体下半の丸みは内黒甕ほどではないようと思われる。口径や器高等数的にはそれほどの差は認められない。ろくろなで成形無調整、回転糸切り、酸化炎焼成である。胎土・色調・焼成は、土師器甕と非常に類似し、胎土はやや軟質または軟質。色調は淡橙色、にぶい橙色、浅黄橙色、橙色等である。焼成はやや不良または不良である。第13図・第14図に示した39点の出土地点は、Q1床面2点、Q2床面2点、Q3床面

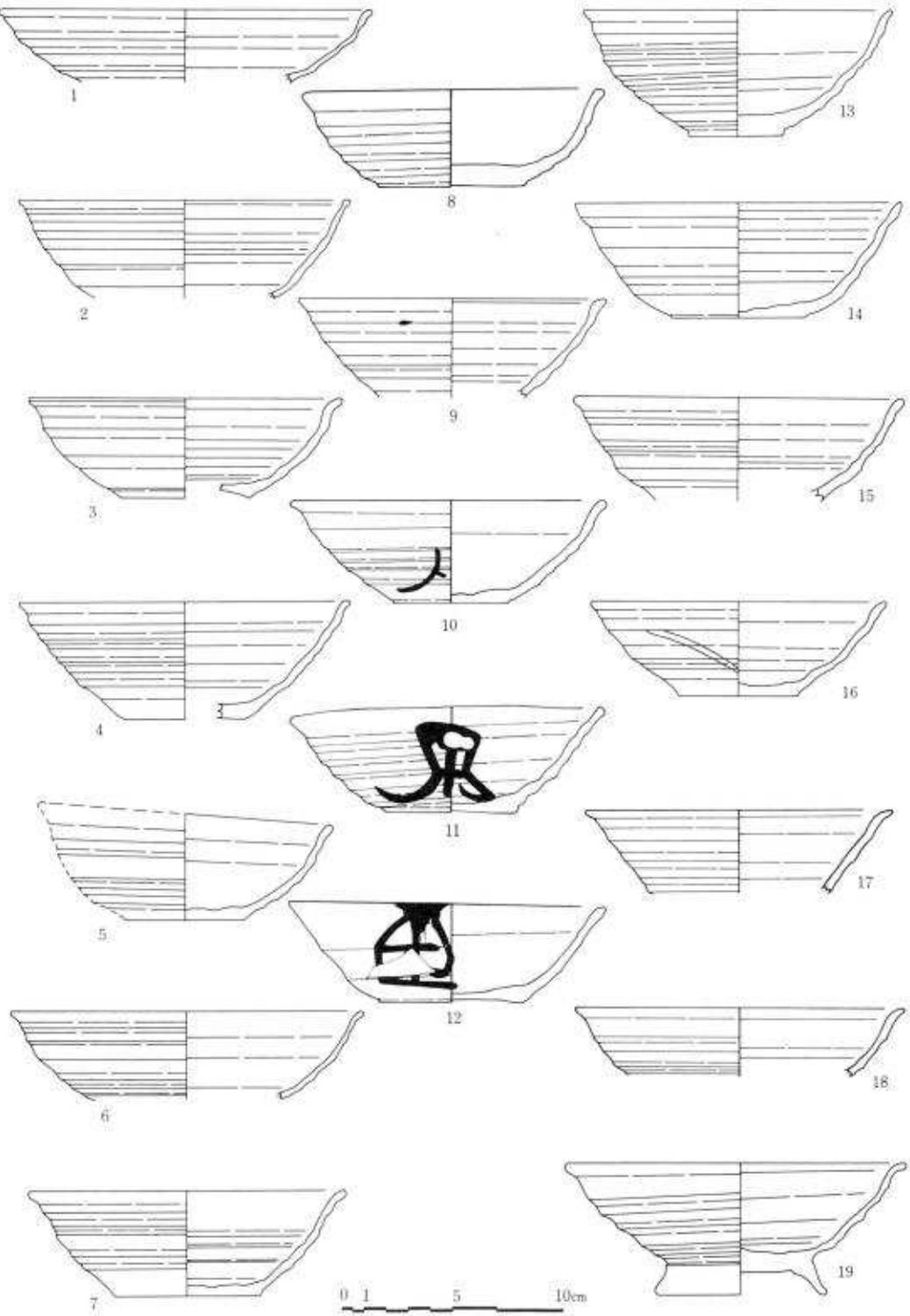
— 宮 手 遺 跡 —



第12図 Ai09住出土遺物 I



第13図 Ai09 住出土 遺物 II



第14図 A109 住出土 遺物 III

— 宮 手 遺 踪 —

3点、Q4床面7点、ピットNo.8埋土1点、ピットNo.15埋土3点、ピットNo.17埋土8点、ピットNo.20埋土2点、ピットNo.22埋土7点、かまと袖1点、かまと焚口とピットNo.15埋土1点でかまと焚口2点である。墨書のあるものが4点出土したが、14図9は磨滅しており不明。14図10は右半分が欠損し不明であるが、「人」と思われる。14図11は全体は残存し字体は明確である。14図12は文字の中央から左下が欠損し字体は不明である。

高台坏 环B類と胎土、色調、焼成のは、同質と思われるものが5点出土している。13図19は、环部下底が回転糸切りで、切り離し後高台部を貼り付けている。接合部はかなり厚いが、下端部は外に開き薄くなる。ピットNo.17出土である。他の4点は底部破片2、高台部破片2で、底部下面は2点共回転糸切りで、Q1とQ4の床面から各1点。高台部はかまと袖から1点、Q1埋土から1点出土した。

その他 鉈溝2点。1点は $4.1 \times 4.2 \times 1.8$ cmで、下面に砂粒が多量に付着したもの。もう1点は、 $3.8 \times 3.2 \times 1.3$ cmで、共に多孔質である。かまと焼燃部で支脚に使われたと思われる焼けた礫が、ピットNo.22から出土した。横5cm・縦3cm・残存部高さ4.7cmで両端が欠損している。他に縄文土器片、磨石等が出土した。

(4) Ba06住 (第15図)

〔遺構の確認〕 基準線より西へ1.53m～4.74m。基準点より北へ26.49m～29.70mの地点、Ba06地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の黄褐色シルト質土である。(第3次調査)

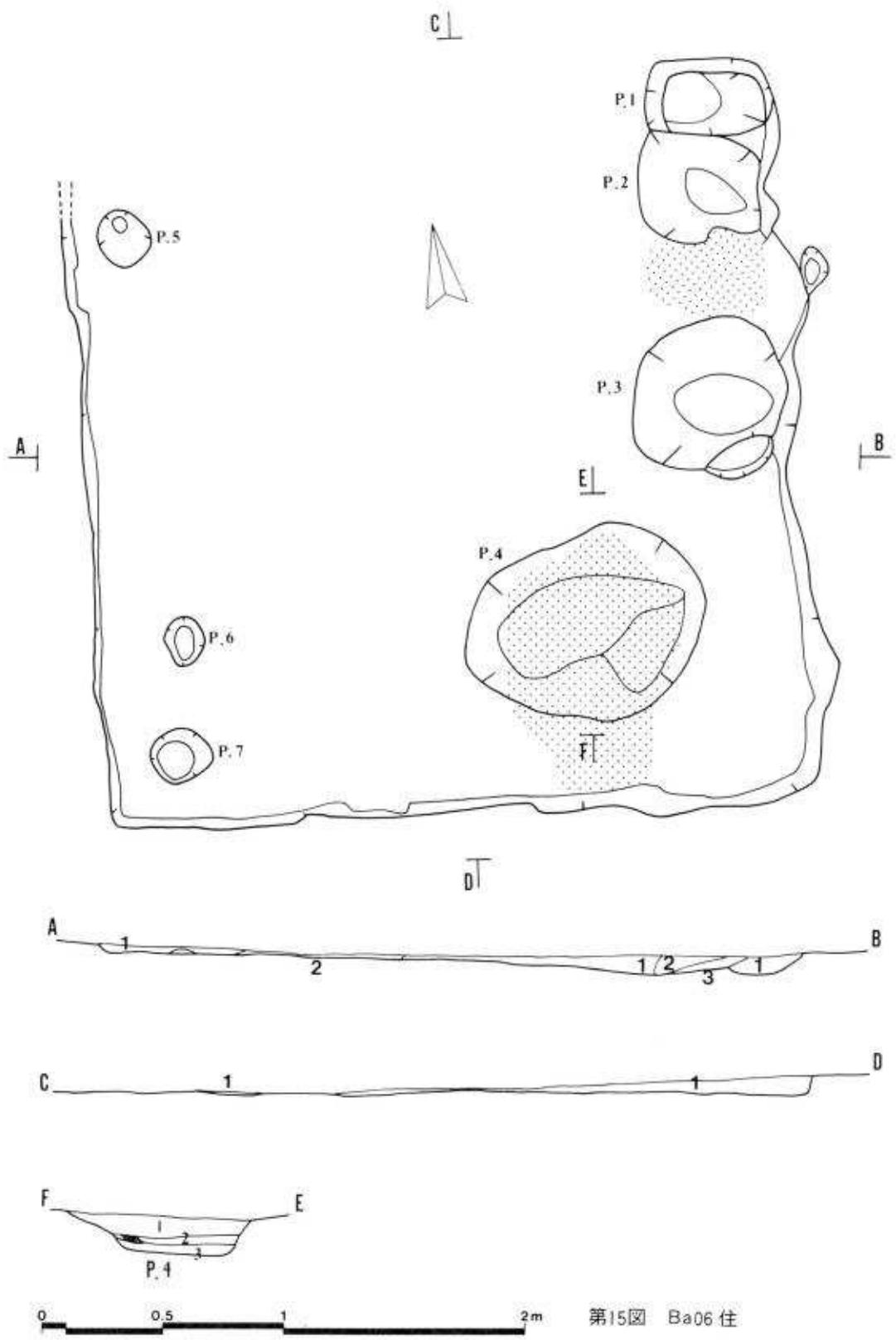
〔重複・増改築〕 前述の通りAi09住南壁東半分と北壁が切り合いで、Ai09住が切っているので、Ai09住の方が新しいと思われる。しかしBa06住の西壁は北端で浅くなり、Ai09住南壁に接する手前で消えているので疑問は残る。また南東隅とBa03溝状土壌が切り合いで、これは住居跡の方が溝状土壌を切っており、住居跡の方が新しい。

〔平面形・方向〕 東西約3m。南北約3.1mの方形である。主軸方向は東壁中央やや北寄りの焼土堆積部が、かまと跡であれば、E-5°-Sである。

〔堆積土〕 生活面がかなり削平されたためか、やはり1層である。1層10YR 5/2黑褐色腐植土層、密で、やや粘性あり。炭化物焼土礫を含む。尚東壁際に若干の堆積土があり、2層10YR 5/2黑色腐植土層。密で、粘性なし。炭化物焼土若干含む。3層10YR 5/2黑褐色腐植土・シルト混合層。密で、粘性わずかにあり。炭化物焼土礫を含む。

〔床面〕 平坦で、地山面をそのまま利用している。床面から壁への立上がりは、緩やかな所が多く、壁高は2-10cmである。

〔柱穴〕 確認されなかった。



第15図 Ba06 住

一 宮 手 遺 墓 一

〔かまど〕 東壁中央やや北寄りに焼土の堆積はあるが、かまどの痕跡はない。またかまどの東に2カ所ピットがあり、煙道・煙出の痕跡と推定もされたが明確ではない。むしろピットNo.4は、1層が焼土・シルト・腐植土の混合で約10cm。2層が焼土・腐植土の混合で約4cm。3層がシルト・粘土の混合で約5cmの堆積。その上に焼土と炭化材が堆積している点、炉と思われる。しかし石組が無く、あまり南東隅に近いため疑問もある。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ピットは、東壁沿いに北端から3基並ぶ。ピットNo.3に遺物が多い。

第5表

(単位: cm 一律は東西×南北)

ピットNo.	1	2	3	4	5	6	7
位 置	北 東 隅	東端北寄り	東 隅 中央	南 東 隅	西端北寄り	西端南寄り	南 西 隅
規 模	上場径 54×32	50×46	63×64	96×81	22×24	18×21	27×24
	下場径 42×26	22×16	41×24	78×32	5× 6	8×14	16×16
深 さ	8	10	16	18	10	6	5
埋 上	黒褐色腐植土 焼土・炭化物	黒褐色腐植土 焼土・炭化物	にぶい赤褐色焼土 シルト・腐植土	培養褐色焼土 シルト・褐色シルト	黒褐色腐植土 シルト	黒褐色腐植土 シルト	黒褐色腐植土 シルト

尚ピットNo.1の西側に、柱穴状のピットが2つあるが、これは、調査用プレハブ倉庫の土台柱跡である。これは遺構検出後に移転した。

〔その他の施設〕 なし。

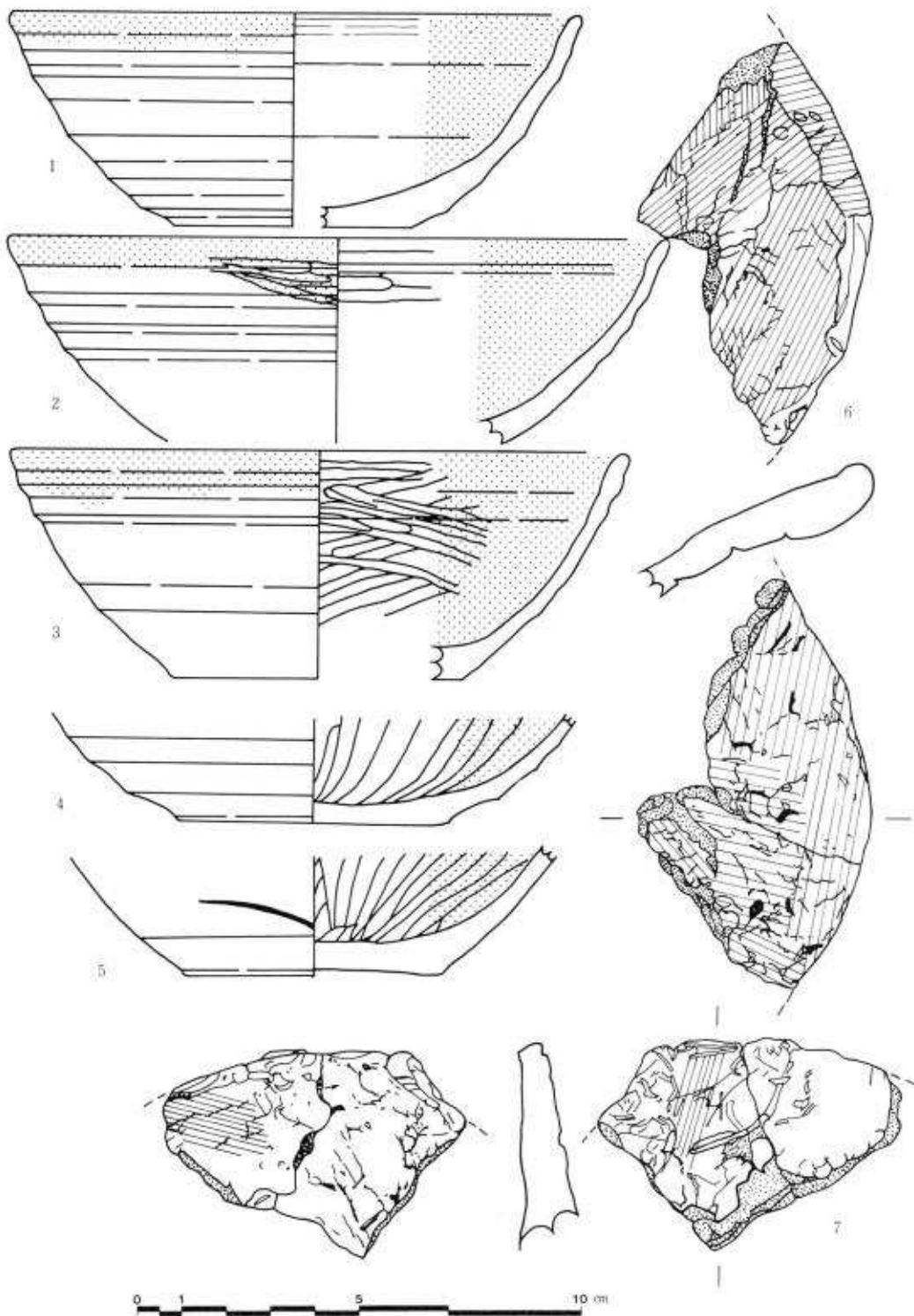
〔年代決定資料〕 出土遺物は、土師器、甕5点、内黒環9点。須恵器、壺2点、環A類1点、環B類2点、粘土塊2点で、みな小破片である。

出土遺物

土師器

長胴甕、5点出土した内4点は同一個体らしいが接合しない。みな体部破片である。4点は、いずれも外面縦に範削り範なで、凸凹歪みが著しい。内面は横に刷毛目痕が認められ、炭化物が付着している。厚さは3~5mmあまり大きいとは思われない。胎土はやや軟質砂粒をかなり多く含む。色調はにぶい橙色~橙色。焼成はやや不良で、Q1床面とピットNo.4出土である他の1点は、細片で外面縦に範削り範なで、内面は不明である。厚さは2~3mmとかなり薄い。胎土は軟質、色調浅黄橙色、焼成不良で、ピットNo.4出土である。

内黒環 (16図1~5) 1は口縁部・体部・底部共に $\frac{1}{2}$ 残存である。口縁部は外反せず、体部下半がかなり丸みをもつ楕形である。口縁部外面にも一部磨き、黒色処理が認められる。内面の磨きは不鮮明で、口縁部にわずか認められる。胎土軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良、ピットNo.3埋土出土である。2は口縁部 $\frac{1}{4}$ 、体部 $\frac{1}{4}$ 残存である。1とほぼ同様に楕形をしている。口縁部外面にも一部磨きがある。2次焼成を受けたため内面等の黒色は残存していない。内外面共磨滅著しい部分がある。胎土軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良。ピットNo.3出土である。3は口縁部 $\frac{1}{3}$ 、体部 $\frac{1}{3}$ 、底部若干残存である。1・2と同様に楕形である。口縁部外面にも黒色が波状に付く。磨きは口端部迄で外面には認められない。外



第16図 Ba06 住出土遺物

— 宮 手 遺 跡 —

体面下端の調整は確認されない。底部下面是回転糸切り無調整である。胎土はやや軟質砂粒を少量含む。焼成はやや不良。ピットNo.3とQ1床面出土である。4は、体部下端と底部全部残存の破片である。体下端底部下面是、調整は認められず、底部下面の一部に黒斑がある。胎土やや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良。南壁下ほ／＼中央出土である。5は、体部下端と底部全部残存の破片である。体下端底部下面是、調整は認められず、底部下面の一部に2個所黒斑がある。胎土やや軟質砂粒を若干含む。焼成やや不良で、2次焼成を受けている。Q1埋土出土である。他の4点は、口縁部2点、体部2点で、かなり細かい破片である。口縁部の1点は内外面に横磨き黒色処理があり、直線的である。胎土はやや軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい黄橙色。焼成やや不良で、ピットNo.4出土である。他の1点も前者と類似し、同一個体と思われる。ピットNo.3出土である。体部破片のうち1点も、前者2点と胎土、色調が類似し、同一個体と思われる。もう1点は体上端部破片で、色調は橙色。Q2床面出土である。

須恵器

壺 体部小破片2点で、内外両面に叩き目痕がある。Ba03溝状土壤1層出土である。

壺A類 1点口縁部小破片が出土した。口縁部は直線的で、体部にやや丸みがある。胎土硬質砂粒を若干含む、色調は灰白色。焼成良好で、Ba03溝状土壤1層出土である。壺・壺A類共に住居跡内Q4の地点で、溝状土壤の1層に入っていた。

粘土塊 (16図6・7) 共に、成形・焼成以前の捏ねる段階のものと思われる。表面になでたような条痕が認められるが、洗滌の際に付いた痕かもしれない。共に縁部の破片で表面に多くの皺があり、凸凹も著しい。出土時は青白色をしていた。共にピットNo.4出土である。

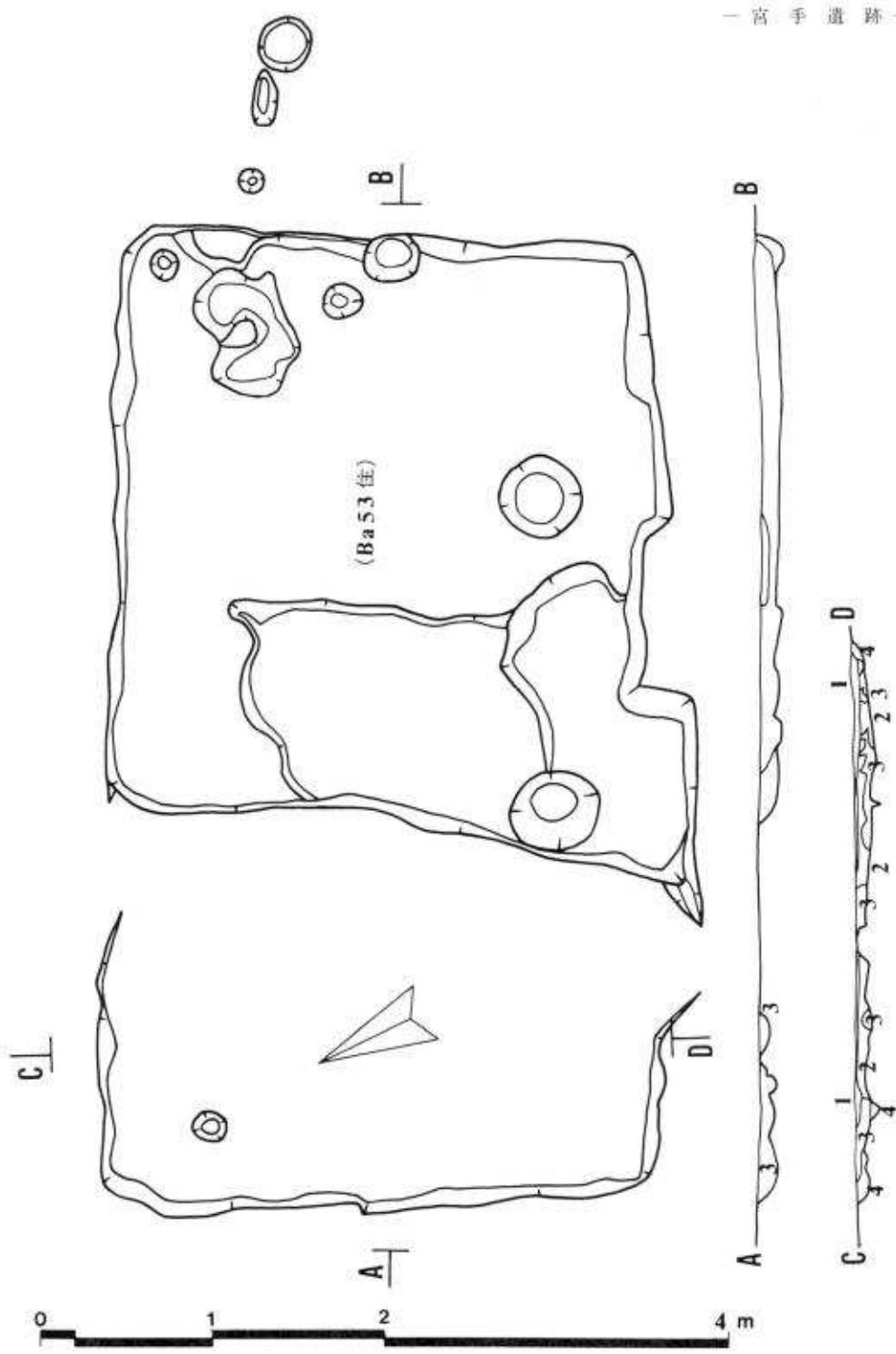
(5) Aj50住 (第17図)

〔遺構の確認〕 基準線より東へ19cm以東。基準点より北へ26.66m～30.31mの地点、Aj50地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色シルト層である。(第3次調査)

〔重複・増改築〕 住居跡の東半分が、Ba53住と切り合いであると思われるが、床面の東半分が、検出段階で露出しており、南北両壁の東半分も消滅しており、切り合いで状態は不明である。しかし、西壁の長さ3.15m、北壁と南壁の間が約3.25mに比べ、西壁とBa53住の西壁の間は約1.8～2.4mと短い事から、切り合いであったろうと思う。両住居跡は旧生活面からかなり削平されて検出されたと思われるから、新旧関係は不明である。

〔平面形・方向〕 東西の長さ不明。南北約3.25mの方形である。主軸方向は、もしかまどが東壁にあったとすれば、E-27.5°-Sで東南東である。

〔堆積土〕 1層10YR3/4暗褐色腐植土、粗で粘性なし。2層1層にシルトが混入する。3層10



第17図 Aji50 住

— 宮 手 遺 跡 —

YR 5% 黒褐色腐植土層、シルト含む。4層10YR 5% に近い黄褐色腐植土層、シルトを若干含む。

〔床面〕 凸凹の著しい掘方状をしている。地山面で、踏み固められたり、叩き締めた痕跡は認められない。東半分は、やや浅くなり、掘り方状の凸凹もない。壁高は7~10cmである。

〔柱穴〕 確認されなかった。

〔かまど〕 確認されなかった。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴状ビットは確認されなかった。北西側にある小ビットは、柱穴状にも見えるが、浅さ約5cmで、掘方の跡かもしれない。

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔年代決定資料〕 出土遺物は皆無である。堆積土は貼床下のものであるかもしれない。住居跡、溝状土壙、土壙、ビット等各遺構には、縄文土器片や石器が出土しているが、この住居跡のみ、遺物を包含していなかった。

(6) Ba53往 (第18図)

〔遺構の確認〕 基準線から東へ1.82m~6.33m、基準点から北へ25.9m~29.68mの地点、Ba53地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色シルト層である。

(第3次調査)

〔重複・増改築〕 前述の通り、住居跡の西壁と、Aj50往と切り合いと思われるが、切り合い状態は、削平のためか不明である、南壁西端部が南へ張り出しているが、Aj50往の南東部コーナーで、Ba53往の南西コーナー部として利用しているようにも思えるが不明である。南壁中央部が、北へ張り出している点も、意図、性格等不明である。

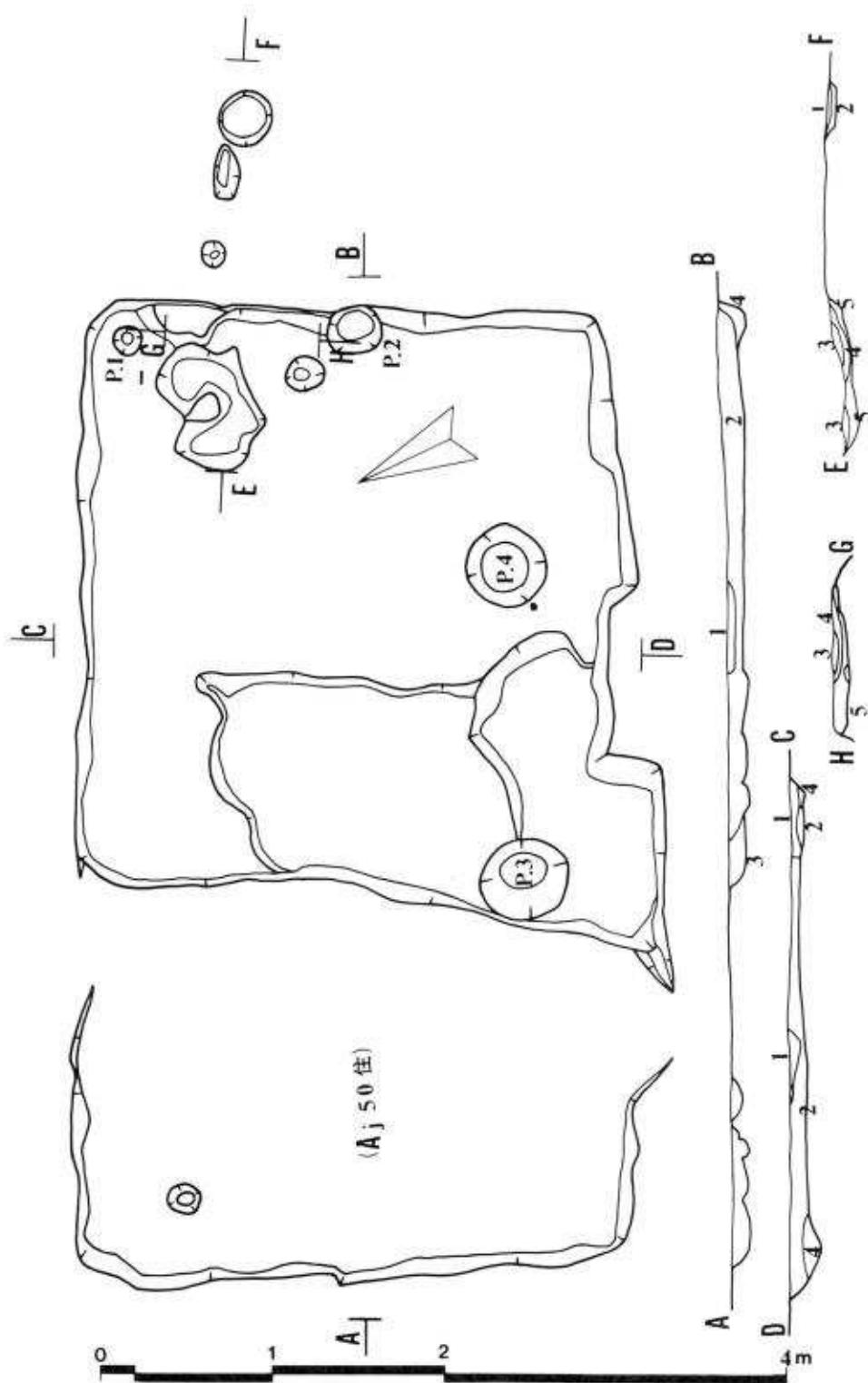
〔平面形・方向〕 東西約3m、南北3.2mのはく方形であるが、西壁南半分が西にやや曲がり、南壁西端部が南へ張り出している。主軸方向はE-27.5°-Sではく東南東を向く。

〔堆積土〕 1層10YR 5% 黒褐色腐植土、粗で粘性なし。2層10YR 5% 暗褐色腐植土、やや密で粘性ややあり、シルトをブロック状に含む。炭化物、遺物を含む。3層10YR 5% 黒褐色腐植土、やや密で粘性ややあり。シルト、炭化物を含む。4層10YR 5% 黒褐色腐植土、やや密で粘性ややあり。シルトを若干含む。

〔床面〕 北半分は掘方状の凸凹がみられ、南半分は平坦である。西側中央が一段低くなり、南壁際西半分が、更に一段低くなる。壁への立ち上がりは、東壁北壁南壁東半分が緩やかで、西壁と南壁西半分が急傾斜である。壁高は約10~18cmである。

〔柱穴〕 確認されなかった。

〔かまど〕 東壁北寄りにつくられ、燃焼部は掘方状に浅く掘り回められている。横約55cm、奥行約90cm。深さ約8cmである。袖は両側共確認されなかった。煙道は底面のみ残存し、浅い



第18図 Ba53住

— 宮 手 遺 跡 —

小ビット状に2カ所並ぶ。壁寄りの方は径16cmの円形で、検出面からの深さ2cm。煙出寄りの方は、上場径が35×15cm、下場径が25×5cm、深さは検出面より4cmで、堆積土に炭化物、焼土をわずか包含している。煙出は、上場径32cm。下場径24cm。深さは検出面より5cmである。堆積土は、2層に分れ、上層が炭化物焼土を含む腐植土。下層がシルトを含む腐植土である。

〔貯藏穴〕 住居跡内にビットは5基検出され、貯藏穴状ビットはNo.1、No.3、No.4と思われ、No.2とNo.5は、柱穴状と思われるが明確ではない。ビットNo.1は、底面を更に掘り込んだ重複の形をし、上場径45×36cm。底面の小ビット上場径17×20cm、下場径12×12cm、深さは約13cmで、遺物破片が数点包含されていた。北東隅に在り、かまどの北隣りである。ビットNo.2は、上場径27×30cm。下場径17×21cm、深さ床面より16cm。東端は、中央に在り、上場の東側が東壁上場と接している。ビットNo.3は、上場径48×51cm。下場径22×27cm。深さ約25cmである。西端南側にあり、西側が西壁下場と接している。ビットNo.4は、上場径約50cm、下場径約28cm。深さ17cmで、南側は、中央に在る。ビットNo.5は、上場径約20cm、下場径約10cm。深さ約8cmで、かまどの南側に在る。

〔その他の施設〕 確認されなかった。

〔年代決定資料〕 土師器、長胴甕7点、小型甕2点、内黒坏13点、内外黒色処理浅鉢1点。須恵器、壺3点、坏B類9点が出土している。

出土遺物

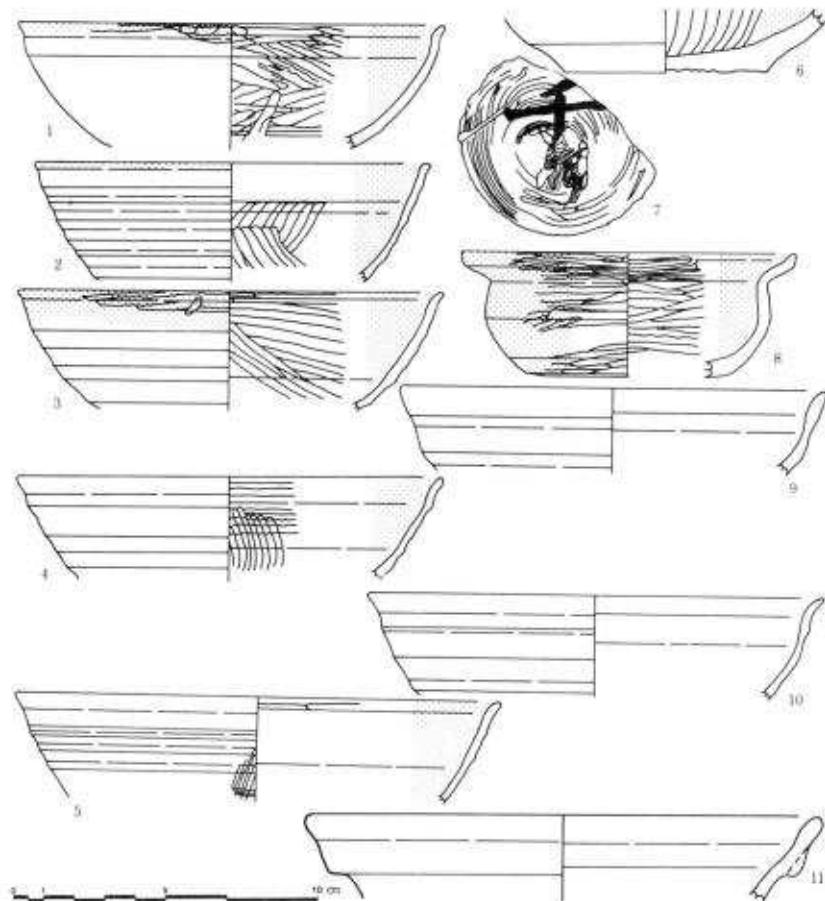
土師器

長胴甕 7点、4個体分かと思われる。いずれも体部の小破片である。外面は笠削り範囲で調整。内面は横又は斜めの範囲で痕がみられる。厚さは5mm前後である。胎土は軟質で砂粒をかなり含む。1個体分と思われる4点は、色調が灰赤色。他の3点は灰白色と、にぶい橙色、橙色である。焼成は7点共あまり良くない。1個体分と思われる4点はQ1床面、他の3点はQ3埋土出土である。

小型甕 2点共体部の小破片である。内外面共ろくなじ成形である。1点は2次焼成を受け外面に炭化物がかなり付着している。両者共に胎土はやや軟質砂粒を若干含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良である。2次焼成を受けた方はQ3埋土、他の1点はビットNo.1から出土した。

内黒坏 (19図1～7) 1は口縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。体部下半に丸みがある楕形で、胎土はやや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良で、Q1床面出土である。2は口縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。1よりも体壁は丸みが少ない。内面の磨きは弱くろくろなで痕が強く残っている。胎土はやや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良でQ4床面出土である。3は、縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。1とは、同じ位の丸みをもつ楕形である。内面の磨きは粗

く、黒色も胎部まであまり浸透していない。胎土はやや軟質微砂粒をかなり含み外面はざらざらした感触である。焼成はやや不良でピットNo.1出土である。4は、口縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 残存である。2と同様丸みは少ない。口端部外面には黒色処理で磨き痕はみられない。内面の黒色もかなり薄くなっている。胎土はやや軟質微砂粒を若干含む。焼成はやや不良で、Q1床面出土である。5は、口縁部体上半部 $\frac{1}{2}$ 以下残存である。この環類では大型に属し、2・3と同様に口縁部が外反する。口縁部から体上部にろくろなで後、軽く縦になでた痕がある。口縁部内面にも縦に傷状の細かい条痕がみられる。内面の黒色は明瞭である。胎土はやや軟質砂粒をほとんど含まない。焼成はやや不良で、Q4埋土出土である。6は、体下端底部 $\frac{3}{4}$ 残存である。体下端回転窓削り調整は内面を下にして、右廻しで行なわれ、砂が左へ移動している。底部下面は、回転糸切り痕が一部残存し、回転窓削り調整は明確ではないが、一部砂が右へ移動してお



第19図 Ba 53 住 出 土 遺 物

一官手遺跡一

り、左廻しかももしれない。7は、6の底部下面で「千」の墨書が認められる。胎土はやや軟質粗砂粒をかなり含む、焼成はやや不良で、かまと燃焼部出土である。その他に口縁部2点、体部3点、体下底部2点が出上した。体下底部破片の底下面是2点共回転糸切り無調整である。

内外黒色処理浅鉢 (19図8) 口縁部1/4、体部1/3、底部大部分残存である。口縁部は甕に類似し、小型甕の体部を極端に短くした器形で、浅鉢の名称は疑問もある。内外全面に磨きと黒色処理が施される。底部は磨滅著しいが、上面に放射状磨きがわずかに認められ、下面是やや弧を画く磨きで、わずかに回転糸切り痕が認められる。胎土は軟質で微砂粒を若干含む。焼成はあまり良くない。ピットNo.1出土である。

須恵器

壺 (19図11) 口縁部1/6残存の破片である。内湾気味にかなり外傾している。内面に褐色と緑色の自然釉が付着している。胎土硬質。色調灰色。焼成良好。ピットNo.1出土である。他に体部破片が2点出土した。外面平行叩き、内面平行と放射状の叩きが付く。胎土硬質砂粒を若干含む、色調は内外表面が灰色、胎部がにぶい赤褐色。焼成良好で、かまと燃焼部、Q3埋土、Q4埋土出土である。2点共同一個体と思われる。

壺B類 (19図9・10) 9・10共に胎土はやや軟質砂粒をかなり含む。焼成は良くない。9はQ4床面、10もQ4床面出土である。他に口縁部4点、体部3点が出土し、いずれも9・10同様胎土に砂粒をかなり含んでいる。Q1床面より口縁部1点、体部1点。Q3埋土より口縁部1点、体部1点。Q4埋土より口縁部2点、体部1点が出土した。

(7) Bb18住 (第20図)

[遺構の確認] 基準線より西へ10.8m~16.1m。基準点より北へ21.3m~27.84mの地点、Bb18地区とその周囲に黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色シルト質土である。(第3次調査)

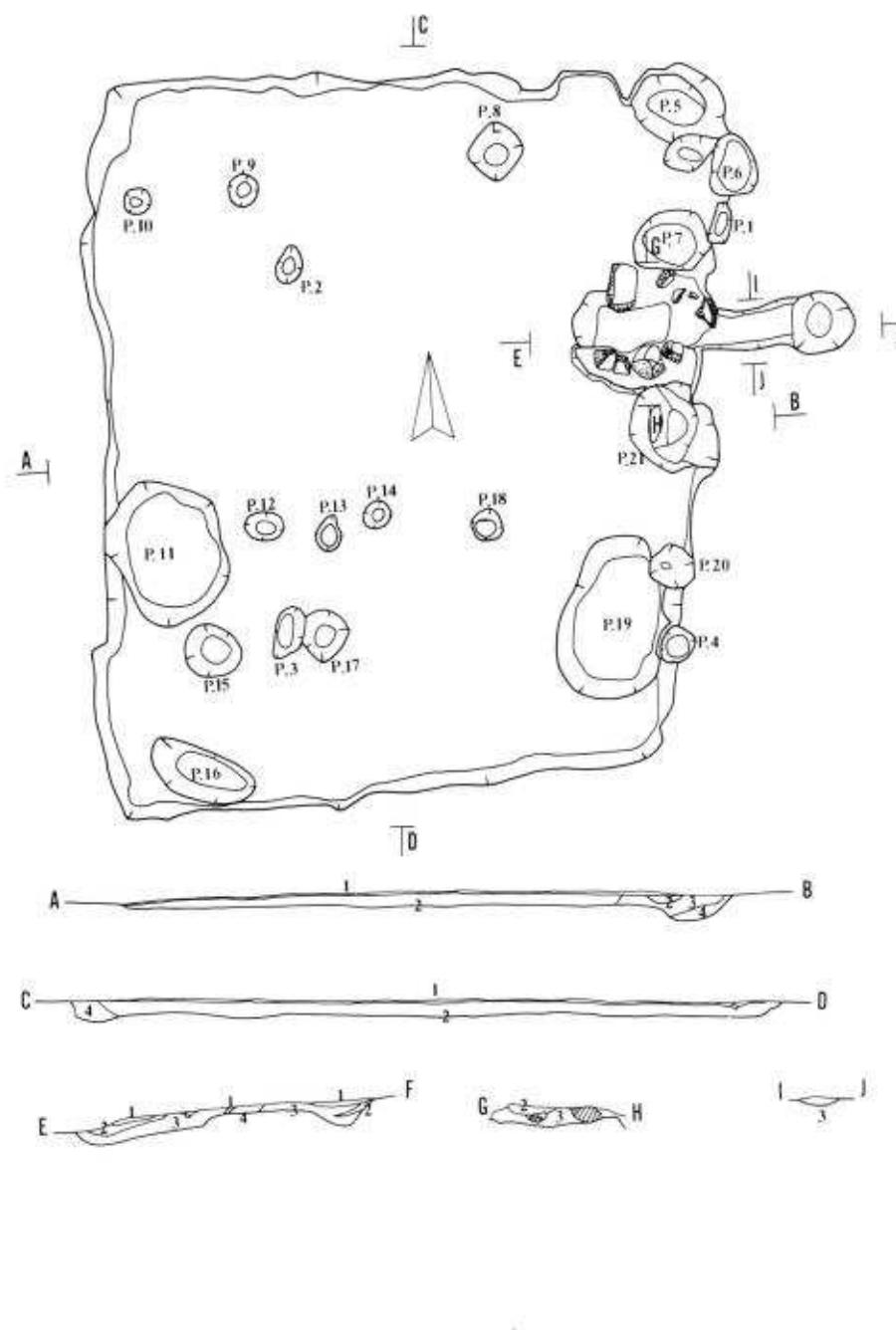
[重複・増改築] Bb15溝状土壤が、Q1床面下からかまと燃焼部の下を通り、Q4床面下へ、ほぼ南北に検出された。また方形周溝より北東に延びる溝が、住居跡の北西側を切っている。

[平面形・方向] 東西約4.7m、南北約5.7mの方形であるが、各壁の長さがみな異なっているため歪んで見える。主軸方向はほぼ東である。

[堆積土] 床面上は2層であるが、壁際に2層の堆積が認められる。

1層10YR 4/2 黒褐色腐植土層。粗で、粘性なし。2層10YR 4/2 黒褐色腐植土層。やや密で、粘性ややあり。炭化物焼土を若干、礫シルトを含む。3層10YR 4/2 黒褐色腐植土層。密で、粘性なし。炭化物礫を含む。4層10YR 4/2 黒褐色腐植土層。やや密で、粘性なし。炭化物礫を若干含む。

[床面] 平坦で、地山をそのまま利用している。床面から壁への立ち上がりは緩やかな所が



第20図 Bb18 住